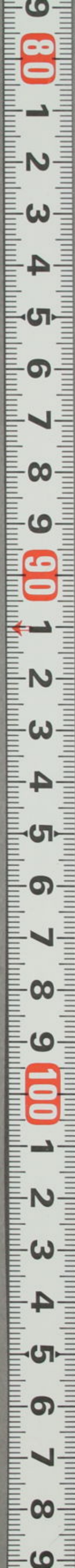


源平盛衰記圖會

五

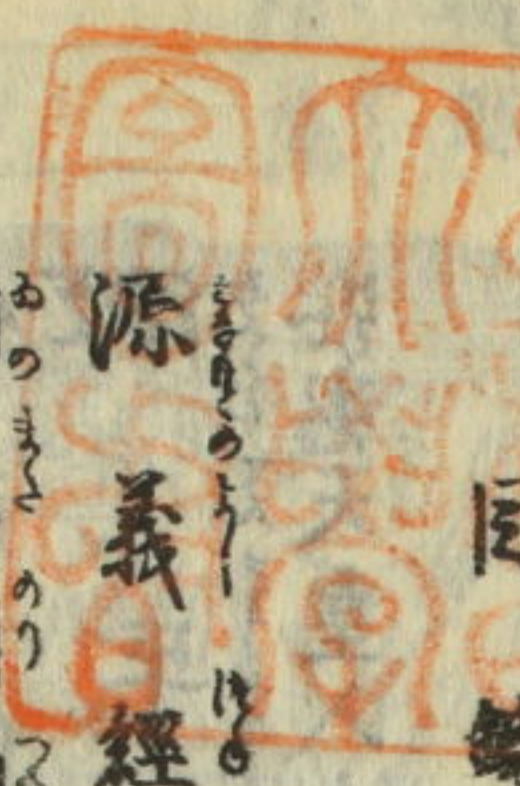
~ 13
3309
5



八三
3309
5

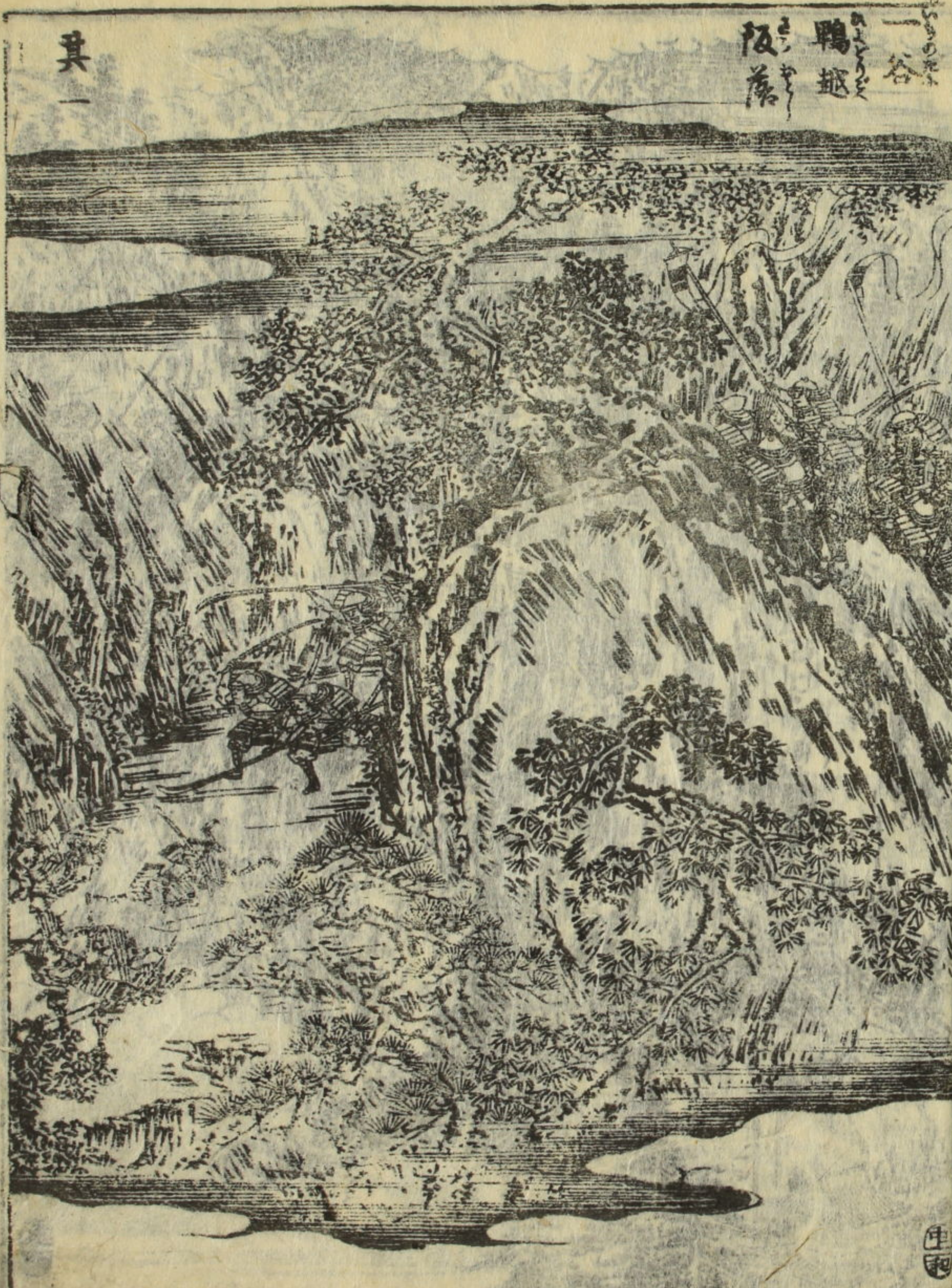
源平盛衰記圖會卷之五

目錄



源義經落聘選
 備侯則綱討盛後
 一谷落城虜重衡御
 忠度通盛戰死
 知盛乘船知章代父命
 熊谷討教盛平家公達討死
 小卒相局入水
 三種神實可返善流院使
 重衡卿清法然上人
 千壽前禪

大正十八年九月廿九日
本大學出版部贈



真一

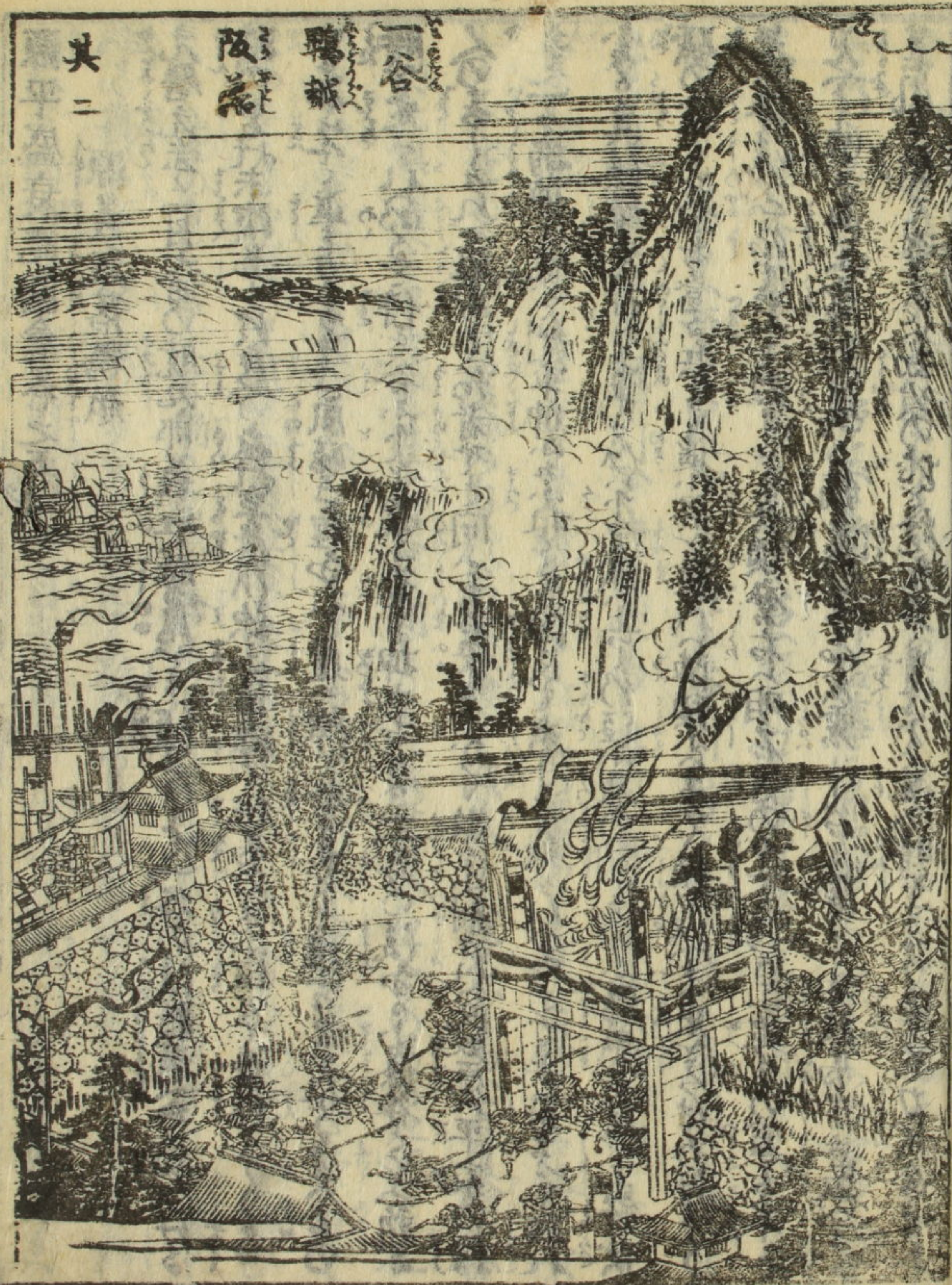
一谷
鴨越
坂

源平盛衰記國會卷之五

鯿魚歌維盛
 盛綱馬上渡藤戶海
 判官殿桃原逆播磨
 義經暴風解籠籠四國
 屋島台
 那須與一射
 黃浦美尾屋關
 新官殿播磨
 佐藤信忠丸
 源平遠新
 安徳天皇入水能登守最後

其二

一谷
鴨城
阪



源平盛衰記圖會卷之五

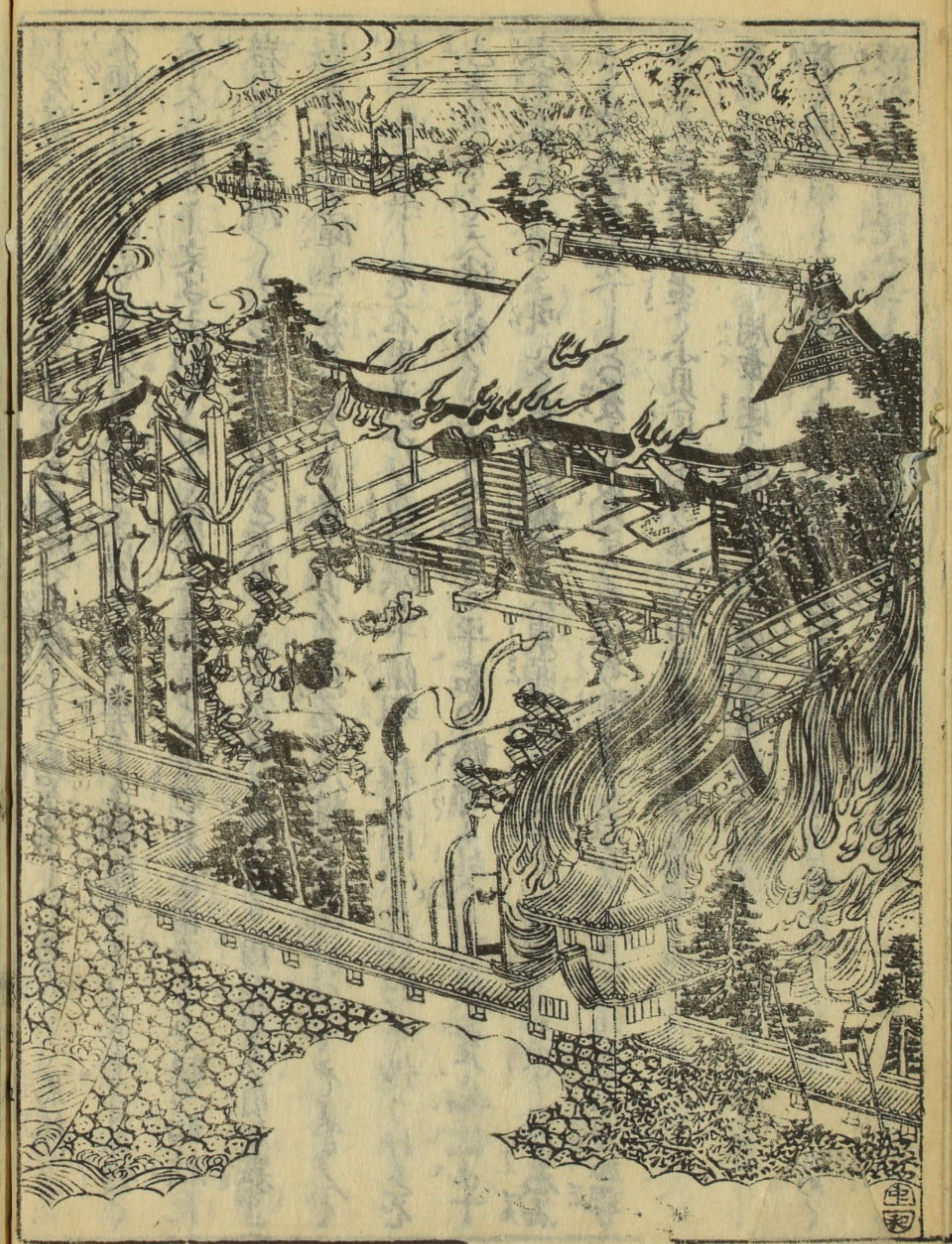
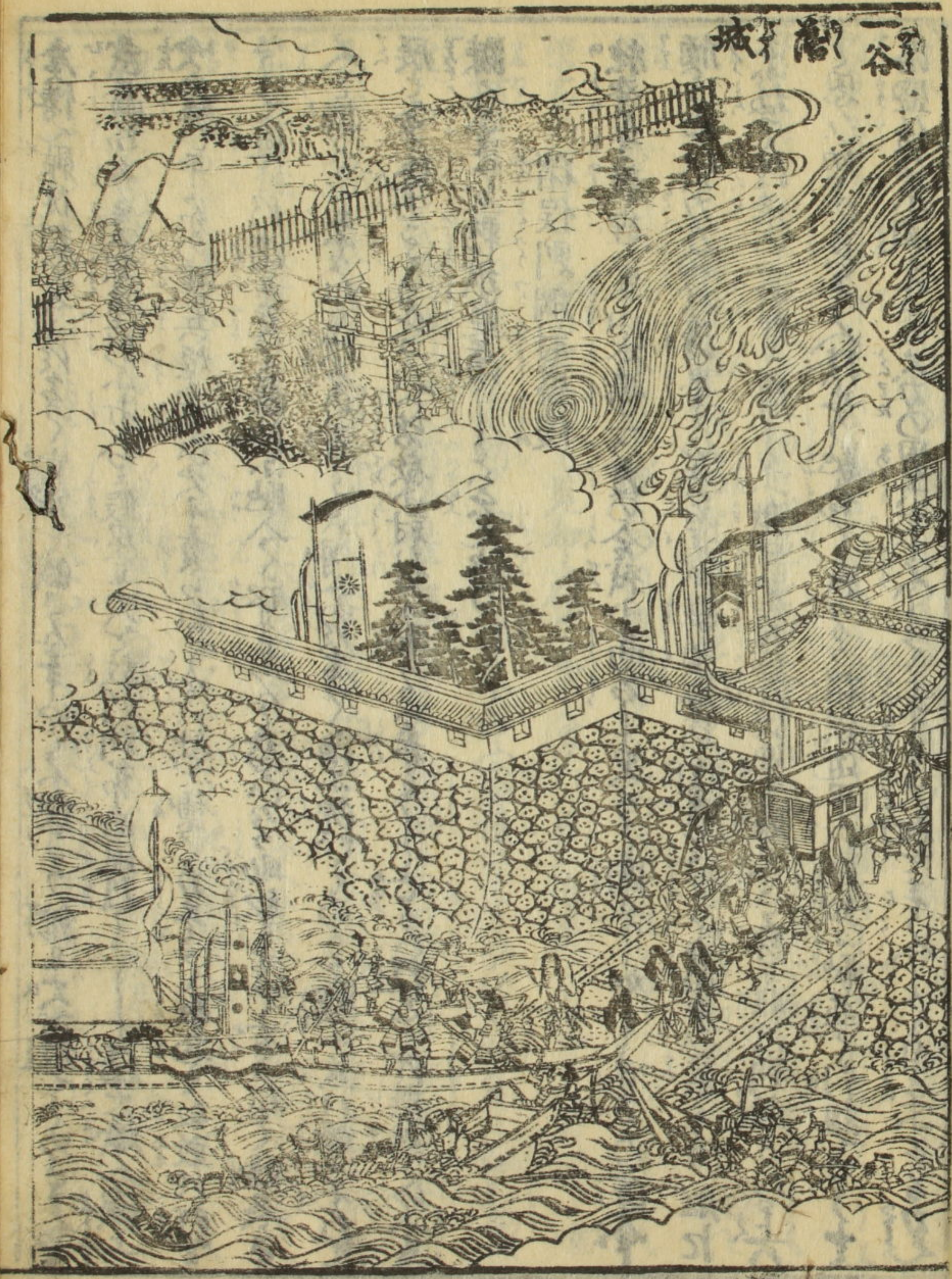
源義經落鴨越

元暦元年二月七日の曉九郎義經は鹿嶋にて先陣して一谷の法勝將に向ひけり
矢の名は未済を以ては左の末原は清水に征馬の定小往て歩りり各
つまねと進むるに風塵を程を道に嶮く勢を継つるに夫の各
時と定りしに侍の谷小嶺を押立たる一谷の後の小嶺谷の新小
谷の者もは通るく何者と同く名を棄ちて散る射たれ此は双原は平家の難
兵一の胡神頭は加軍神不斗んと源氏も悉く射れはり平家も討れ
る其の真後就尾標してあひ不斗或上り乃は復原の初めに小鴨越一谷の上鋒伏
着し海浪は心を荒く烈しく左に須磨右に明石月の光も清く追ひの軍半と
見る頃叫ぶ聲射遠る箭の名を震へ一谷が響へ赤旗馬下立双とく
是の頃鹿く々と切火の地焼かれ貴うり流し時至り追ふ力合せん

と見え下に實上七八段をうりる白砂の馬の尾をゆきと探さりたる
歩りももも馬ももも落と下る新小嶺は佐藤之弟次信と大鹿毛と名馬も馳せ
大將義經大馬黒と一馬小赤と各打向けて鹿の通路は馬の馬場あら各
落せくと進む兵もづれしと馬を谷引むけ心を先陣とをれと流石も
名をた嶮難といふ綱を引く侍也馬を恐れし跡跡をる赤顔と顔と見
合さして個に果をけ居らる大將義經は一馬の落掃と見一源平の占兆を
しと草毛の馬目白鹿輪の白丸を旗に進く源氏は一鹿毛の馬小赤鹿輪の赤
丸に赤旗に進く平氏も追下り各本向り見おたらせは小石交りの白砂地七八段
をうり進むと進むといふといふといふといふといふといふといふ
岩の上り宛轉下り敵中に司益後の陣をの後は馬を引て身打ちひ
しと馬の方を守りと舞動し小嶺を登りる平家も馬の身を打ちひ
せと再び進むと敵中に馬を引て敵の者を見て馬を引て敵
悉く新御曹司と源氏の白旗を引て向旗五十流を引て向旗を引て

臨陣して討つるに破れし馬は心二つに割れ
鞭四燈といふ甲のあわれみは詮は心は馬を
馬の立掃をなく本とせよと直引引け清けや
せし流落す下しつる二千餘騎の兵も
お鹿せ樂な双つて綱をひく同く居る
落止はせぬる意を覗て入れし表石時
いよいよせたる下し廿丈のあつたは
登れ便もかたはる互堅唾を吞み思ひ煩
我等甲投信濃城に持し鷹は時免り走
落されしと思ふまはれ岩より義連定時
直に鬼く落れし將は直引引け清けや
も獲て居るなり島山赤城の嶺に
馳せりるる馬は二鞭をひく日月の
下を顧みて申すはあつた馬は
不便之日頃にはあつた今日には
不本と馬と十文字ふ引かきし
岩の道とをわくとあつた下は
馬ははせし人隨をわくとあつた
捕せし落果しと思ふはし
心考はあつた六地も初くとあつた
文字はあつた喚び叫ぶはあつた
より欲の籠をわくとあつた思ふは
せんごとく鎧甲脱ぎて小貝足
取馬は騎隊もかく周章迷ひ味方
者も同上討つて切殺されし
形勢は重の陸上も宿老の技は

曹司下知りひけふは城廓



唐傳へ賊徒殺と云はるる多し官軍を滅さん事いし不便なり館且火を放てしもの事也
武藏坊弁後忽屋形ふ打入り假屋且火を放り折布西風烈し一七猛火熾余上
吹渡り平家の軍兵煙小咽ひ火責りけり今故に傳へ力多し取れぬ取敢て打
さしとて迹は行諸れ走り疎汝不馳入り記事多し惑ひたる助也多し有るはも物多し
人々擡へて去るは火多し者もい河系に多く海不洗ひしものも船小焦れ煙も多し
灰とあり逃去るも足さし皆敵討れたる助るも希しと云ふに取れぬ無難なる事
疎之よりか鴨紙運落しと云ふなり

猪俣則綱討盛俊

能登守教經の室山水嶋一子の合戦高名ありとて國々かき味方乃運命
頗るぬれ力及はば薄墨といふ名馬小駟須磨の國をさして落ゆし其より船に
乗極り此情の岩屋に渡りて中務司盛俊に迎へて遁りて身非難於斯頗るたす上
と思ひ切つて思き人跡止り馳合へ戦多し猪俣近平一則綱も馳並り引廻りて
落盛俊は紫園をさる大力の男七十人上下と云ふ人記をまへりて自らさる力也

百人力もや有る事と世に賞する剛毅なる近平も力也と云ふ者も然る盛俊も遇われ
殺さるは既し取れ押付られ働物甲の事も剛上力と雖も一多し捨捨さんとい
たり小進平六八八と扱はるる初を初と云ふ事と云ふ計の賢き剛者も七十九も
駿に申々々押御邊に誰人ぞ故に居候も名聞く後首を取ておき勳功の賞よし然れ
誰とも知らぬ首取といふ事と云ふは東園も名ある侍士飛り知る事と云ふ事と云ふ
平家の公達も侍の殿原も見知れり事と云ふは是は誰首といふ事と云ふは唯
大猫の首と等し名も多し勅く實檢も海もといふ盛俊もといふは抑かかぬ扱はる
誰と向ふは武藏國の住人猪俣近平一則綱と云ふ東園も名譽の首之兵衛佐殿内
も一二の者は數らるる諸の流邊に誰をとと云ふ向ふは平家の侍も兼重もかゝる敵中
兼司盛俊といふ者もと云ふ事と云ふは近平六傳もといふは國の一人もまをりて夫取ては在り
情も頼りしと傳ふる則綱も今御事新と云ふれも然故も組でたり同くは死せし
兼人のおふ切もなり平家も但殿原今も落人ぞかかれば則綱も人討りてこそ
平家もあせん事ありはる庄君代ふおせざれば縦令則綱も首を取らりてこそ神め

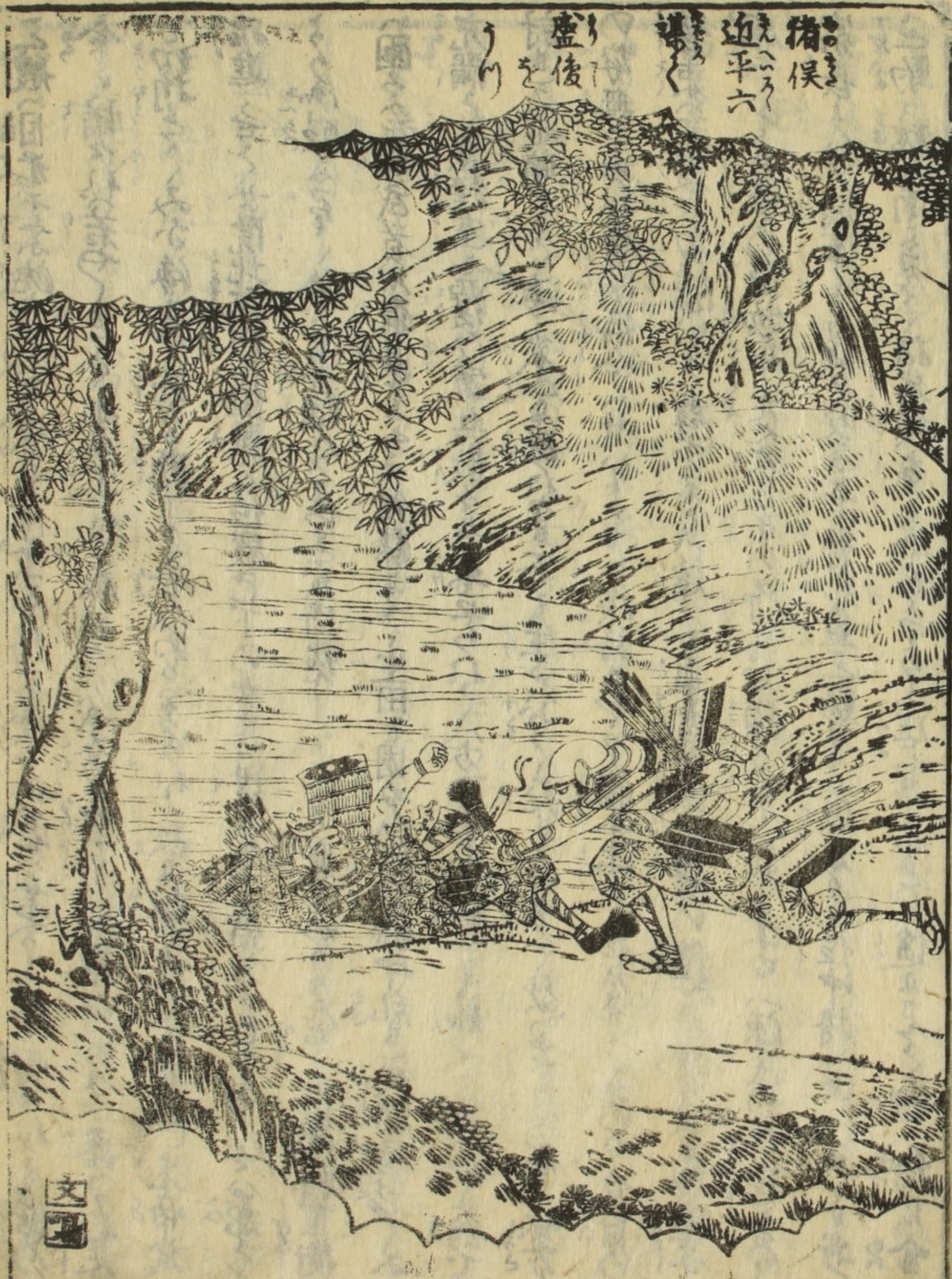
とて勲賞勲功に傾けりし東の事なりしか只則綱が命を助けりしが鎌倉幕府申て
わらわ親族の人をぞ看せんとしひん盛俊嬉しく思ひ猶抑かゝる實に助かり
つゝ是則綱を向ひ子細をなすべし我を助かりし事助なきをあらはに怪の鳥獸と
思ふまじし況んやとて志す不非に池禪尼の兵衛佐殿と助をせりし同ト
平家の内かゝる池殿の公達を助進せし事あり作とせり盛俊實にや
思ふくあり引能くは是後水田の畔に二人尻打撃く心静かき池に越中
若司申多の諸侯盛俊の男女の子を千餘人持て作せし我を人侍といふ事作し
かきより其の悲しき事神造の命を助かる事思ふべき何事申有る事や
近平六宗従の神を助まんまの事は作せし中へ信と及ぶ事なりし
新井盛俊五希惟廣の者五騎せし諸の方より馳來る哀れに故に仍命とす捕せ
むやと思はるる系氣に盛俊あれし是を惟思ひ源氏の軍兵とや近付侍の事と今釋
之猪俣成といふ近平六宗上りまはるる事と安法といふ盛俊五希惟廣の宗思ひ
る事とはとる事惟廣は目公懸たり則綱思ひたる惟廣と侍受く盛俊を討つる

二ノノ討つる事人の事本意か討つる事申すに建通れ難く盛俊より
盛俊を取して之甲斐なる後の事と事思ひ則綱かくて作心若く思ひ
つゝはとて本の新居直揮もく左右の事方とて真運其後の深田に突倒と
盛俊頭水の底に足は落し絶えんとす則綱上り退かひとあらむ首は捲
落し太刀の鋒は貫く事と擧げく馬に乗る事と故に神方もあれし平家
の侍小鬼神と闘えはる城中若く盛俊を頸猪俣近平(則綱)取つること成り誠
に委せし事なりは薩摩國住人浪平能一の物と

一谷落城膚重衡卿

去程一谷城に中央ありて追ひ五萬餘騎の東の方生田來り攻め上り然谷平山
一陣二陣は莫ぬ今防ぐ者あり搦まし一萬餘騎の中七子餘騎と之軍山の山西の
城戸にありし子餘騎は懸城より落し攻め平家東生田柱は千餘騎あり
圍ふれし館々の猛火燃ひつゞり懸し東西より攻められ人責られみか船に
乗る諸月原より落りたる事海に助船あり有るれし館は遠家なれし人船

猪俣
平六
後
を
盛
り



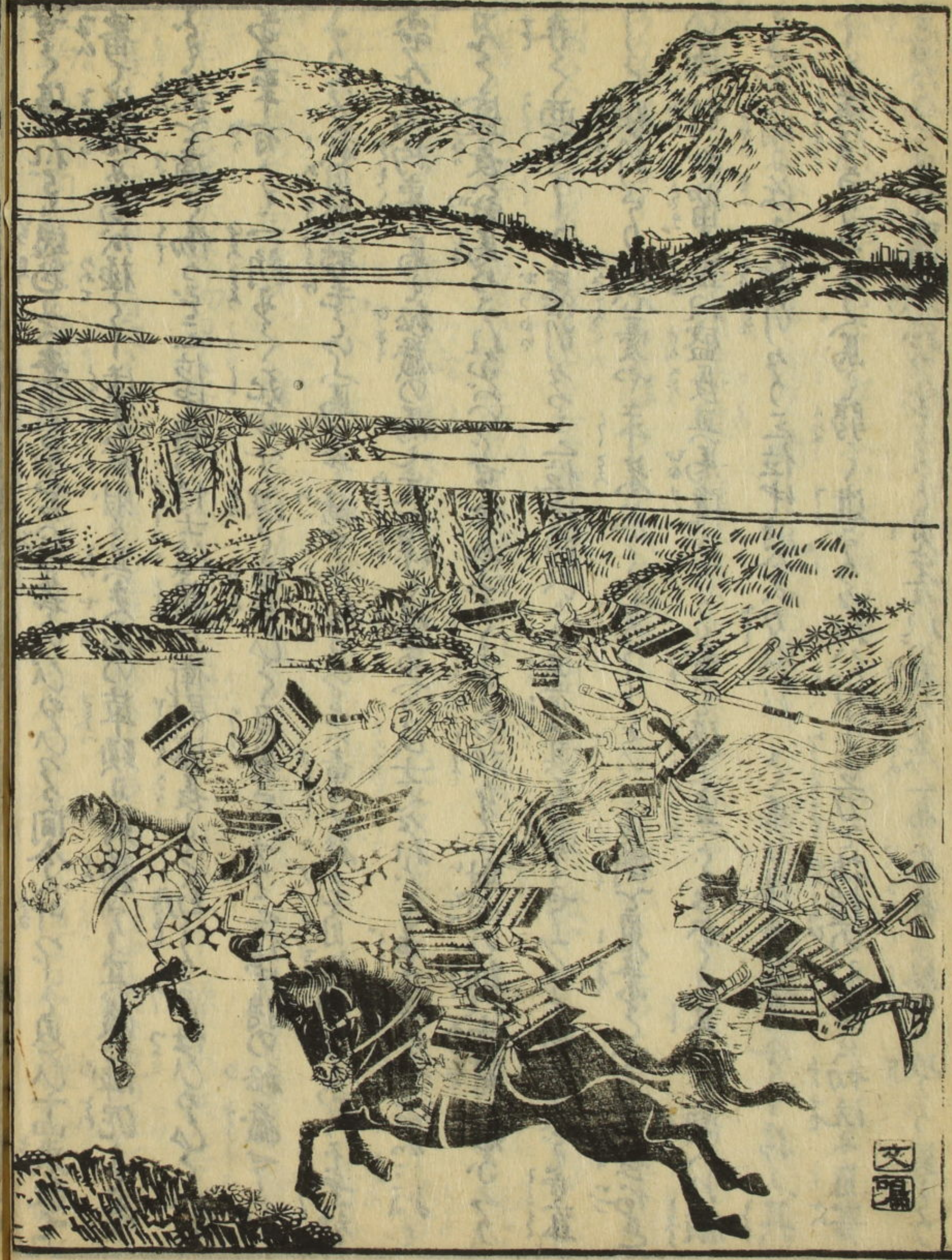
文



二艘目も小舟沈る上の人をば棄たれし次々の者もさうなれり
今も情なれ若くとも船を棄んと取付たる太刀長刀の羅針も
と切拍とくみか海を沈る物とて亡ぶる者多し故に組で死する者少
非進むく女院北政所二位殿之位殿已下の女房達大信宗盛父子已下の人々も
より船を棄り海上に出渡る人も多し況んや悲しかりん乎二位中将重衡
の困々の駈武者取集るに子餘騎も主田と固めひるが城中立火船屋形も
充滿し黒煙空を覆ひ軍兵散るも数えられなく方落るも知らず者少故に組で
討まへ逃趨るも海を舟を擲れども生るも少く死するも多し故に重衡の味方
の勢無きなり重衡卿今叶はざるは溪路もかき諸小浜もあはれなる真目の
將東へ裾衣も白練も心く群千も狐縫する直垂も紫裾濃の鎧も著る馬も
鹿毛もて亮者の逸物早走之入居るの沖馬も鎮るもて其家も一源氏の兵庄も
家長も大將軍も入る父子系替の童も騎も追奉る二位中将の連の地も歩
之駒も林瓜南も入る極有須磨もかき入る庄も常も入る通も入る鞭も鐘も合

せし追われし逸物も其家もさうなれ延暮のひのひも向今叶はら思ひし東取て
番も追掃も馬も極く遠く矢射具も其馬の草頭も射籠るも其後障泥も歩
も鹿も痛く物もど二位中将の侍士は藤兵衛尉盛長も切らるる呂はひのひも
あも車有とも一駒も死すを深く契ひく呂具も入る二位中将の秘藏せられ
らるる衣も無結毛も馬も騎せられらるるまも童子も毛自然の車もあも系替
もその約束の馬も秘藏の馬も主の深く獲るも武士もなれども系子鹿毛も紫衣も
入る盛長の我馬も入れぬいせんも主も射捨たり射向の神也赤符もあも
舟も西もさうなれ落りたるも二位中将いも盛長其馬進ませしと信せぬも空耳
も馳りたり穴心憂や平床かか契りしものも重衡も見棄るも盛長何れ
の困りのせ留せ止れ盛長其馬進ませしと聲も張上宣ふもとかみ耳も聞入る顧
もせし諸も泳ぐ馳りたり二位中将いも力及ばず馬も海も打入るも其
も遠はさるるも馬も弱く進らるるも小立刀も抜鎧の引合も切洗も自害
もあはれなるも海も入るもさうなれ見えたり故に兵庄も家長も繫く攻り馬も

重衛の虜也
成沙
侯長石忠
走



文陽

飛下り来替小持せしる小長刀と取十文字小持し闘をまはしと歩らる君の御心
と目遣しせり家長を津連とあつて作らる御自害有らるはつてせも
津伴はるるを畏る有らる位中將自害と志せり遠はるし入水と御心
立願ひひらるる家長はるる我馬は推棄せり指繩せり鞍の志願ふ付
て我身の願ひのつてせり其勲功の賞と陸奥國の一郡とを賜ひたり
人の中重衡卿を人虜と成るる事南都二併殿と焼亡し之を報かや重衡は只
七歩の命を危し絶し且の死を遁せり顔と都鄙と瀑一名と遠辺と辱たり後藤
兵衛尉盛長は駿馬を騎し甲斐のつて命をうらた後(慈深法師)の
尾張法橋といはるる者の後家尼が後見しそ有るるが尼新詔の事ありて
都(せつ)し一人おまはるる位中將の要りしとあひし一筋といふ
成(と)者(と)さかて尼法師の屍舞して都(入)つと愚(と)者(と)無(と)らる

忠度通盛戦死

薩摩守忠度の生年四十一歳と白くして醫者(と)生(と)り赤地錦の直垂(と)黒
緘の體(と)申(と)は着(と)る(と)は高(と)鳴(と)る(と)る(と)白(と)鶴(と)毛(と)の(と)馬(と)は遠(と)馬(と)金(と)の(と)文(と)お(と)り
星(と)を(と)騎(と)り(と)る(と)川(と)藻(と)川(と)須(と)磨(と)板(と)石(と)を(と)る(と)は(と)諸(と)君(と)付(と)せ(と)落(と)り(と)去(と)麻(と)呂(と)の(と)位(と)正(と)部(と)
六(と)弥(と)太(と)忠(と)澄(と)十(と)餘(と)騎(と)の(と)切(と)り(と)鞭(と)を(と)て(と)追(と)は(と)る(と)忠(と)度(と)引(と)と(と)固(と)部(と)が(と)る(と)源(と)次(と)源(と)之(と)
慈(と)王(と)丸(と)の(と)人(と)と(と)我(と)ひ(と)み(と)か(と)る(と)討(と)れ(と)ら(と)る(と)今(と)忠(と)度(と)を(と)は(と)け(と)下(と)り(と)忠(と)澄(と)馳(と)並(と)り
引(と)細(と)く(と)と(と)落(と)六(と)彌(と)太(と)小(と)成(と)忠(と)度(と)赤(と)糸(と)の(と)管(と)銀(と)の(と)筒(と)金(と)巻(と)る(と)刀(と)を(と)抜(と)儲(と)け(と)
お(と)り(と)六(と)彌(と)太(と)之(と)刀(と)を(と)て(と)突(と)き(と)馬(と)上(と)り(と)一(と)刀(と)落(と)る(と)一(と)刀(と)落(と)付(と)一(と)刀(と)落(と)あり
と見(と)た(と)二(と)の(と)刀(と)の(と)渡(と)の上(と)を(と)突(と)き(と)る(と)負(と)と(と)の(と)刀(と)は(と)胸(と)板(と)を(と)突(と)き(と)か(と)領(と)乃(と)下(と)行
頬(と)は(と)突(と)貫(と)と(と)忠(と)澄(と)洗(と)せ(と)る(と)れ(と)郎(と)等(と)落(と)令(と)薩(と)摩(と)守(と)の(と)妻(と)は(と)腕(と)射(と)鞆
か(と)お(と)落(と)る(と)忠(と)澄(と)今(と)叶(と)下(と)と(と)忠(と)澄(と)を(と)引(と)興(と)し(と)行(と)ひ(と)提(と)あ(と)の(と)念(と)併
申(と)く(と)死(と)ん(と)と(と)抛(と)り(と)長(と)二(と)葉(と)を(と)て(と)投(と)る(と)忠(と)澄(と)五(と)體(と)も(と)確(と)る(と)病(と)も
真(と)間(と)忠(と)度(と)の(と)鎧(と)上(と)帯(と)切(と)物(と)具(と)脱(と)け(と)諸(と)君(と)西(と)面(と)念(と)併(と)高(と)聲(と)唱(と)え(と)其(と)後
忠(と)澄(と)太(と)刀(と)抜(と)き(と)畏(と)る(と)中(と)將(と)君(と)を(と)誰(と)人(と)も(と)殺(と)せ(と)る(と)同(と)れ(と)薩(と)摩(と)守(と)は(と)不
覺(と)人(と)名(と)あ(と)れ(と)と(と)名(と)あ(と)る(と)と(と)名(と)あ(と)る(と)と(と)知(と)れ(と)か(と)去(と)ら(と)る(と)已(と)ら(と)た(と)故(と)取(と)は(と)る

者を必よた勸賞を願ふありて最後の十念の公高聲を唱へて申疾く宣
 へて六弥太進善く御頭を討て脱捨する物具を乞ふるも一巻の巻物あり取具して
 首を太刀の切銘を貫て上は本陣に歸りてまれば誰人の頭を乞ふるも一巻の巻物あり
 云はばはらへてかくる遊鳥を名をたいたひける人も見忘るるなり一巻を披いては歌
 多々あの中は旅宿たの題もく一冊あり

行なはく本の下かけは宿とせはたをまきとあつてあり

忠度し書はるるもまを薩摩守と知りていふ天政入道の事公達の中より
 心も剛し身も健みありまゝたれも運の極み成れり六弥太を討れりなり勸賞へ
 六弥太神妙くく薩摩守の知りり庄園五箇所を賜ひて勲功を誇りて越後之位
 通盛に紫地錦の直垂を着て深淵瀧を籠りて連鉄葺の馬を騎りて溪川の側を
 下りて下りて一團扇の旗を掲げて兒王賞七騎を討て追駈るる位は後命と延べりて鞭を
 當てて落やうまに辺江國住々本庄の住人本村源三成綱といへ者追駈て落合細て
 かり二位通盛上り成りて源三驛返しくたれも二位の力や増え抑ぐ更に初た

刀と援源二の首と捨てしは持たまれりなり靴が脱れ切らりなり源三
 成綱へ紀中將成高四代の孫本村推頭の子を乞はるる本庄の庄も居住しりなり原へ小松
 大石をさきつて後平家の人を見馴
 奉りたり源平の合戦は侍る本原三秀松の子息守みか刺東下りて向原三成綱
 も鎌倉下りて軍兵を駐せりなり上りていれ戦を二位も細を成綱叶りて思ひ
 たり下りてふかく誰やんと思ひなりは君もくはさなり知事とせたりん
 むも争う通く参り来りて平家平家その身も御方とせ参り参りたに
 らる親も者もも参りて今公戦場を駐りたり何れ御方もも疎かたり
 たりも特見馴れし通きり御頭もも参りて細に進子に頼るるに
 らんりも嬉しきまをたれに二位に流してそそ思ひ来りて見馴れ者も不便
 いありて軍の道にかゝり今加搦の團を定むるを思ひはらめりて搦帳に
 たり後見侍る本原義清主従五騎も流し源と歩とあり成綱とありて五布あり
 見放りぬりておひりて二位素と頼り新甲の透間より源三刀と援源三刀と



擧げし弱るる心カと合さず驛返一記しも立に懸て二位の首と取尋たのり首と
掲げし陣頭も澤々たる心ゆくぞ見えたりる藏人等業盛は今年十七歳小成の一
あれ門脇中納言教盛の子なりと通盛の舎弟と長治の直重も所々菊の花と因
て緋緘の鎧も連銭葦毛の馬も騎多味方より離れぬ所ち行をたると知の心より
くれは渚もまきかきつきたと常陸國住人泥屋田吉安月余を馬上より組を落し
成下り成務ひ落るる程古井の中柄ひく泥屋下りあつて討せしと泥屋を布
落重くすまの甲は緩み取付く引んとまわれはたま頭と強く撥かす甲の緒と
据切る五布甲と持たせし二尋計せ扱られるとこれより多負うるれば紀上りて業盛の
首と取見とた漸井の庭より引出しより業盛十七歳も心剛なりと極くよく
力の強くまゝなるめやとくみかまれば惜たり

知盛乗船知章代父命

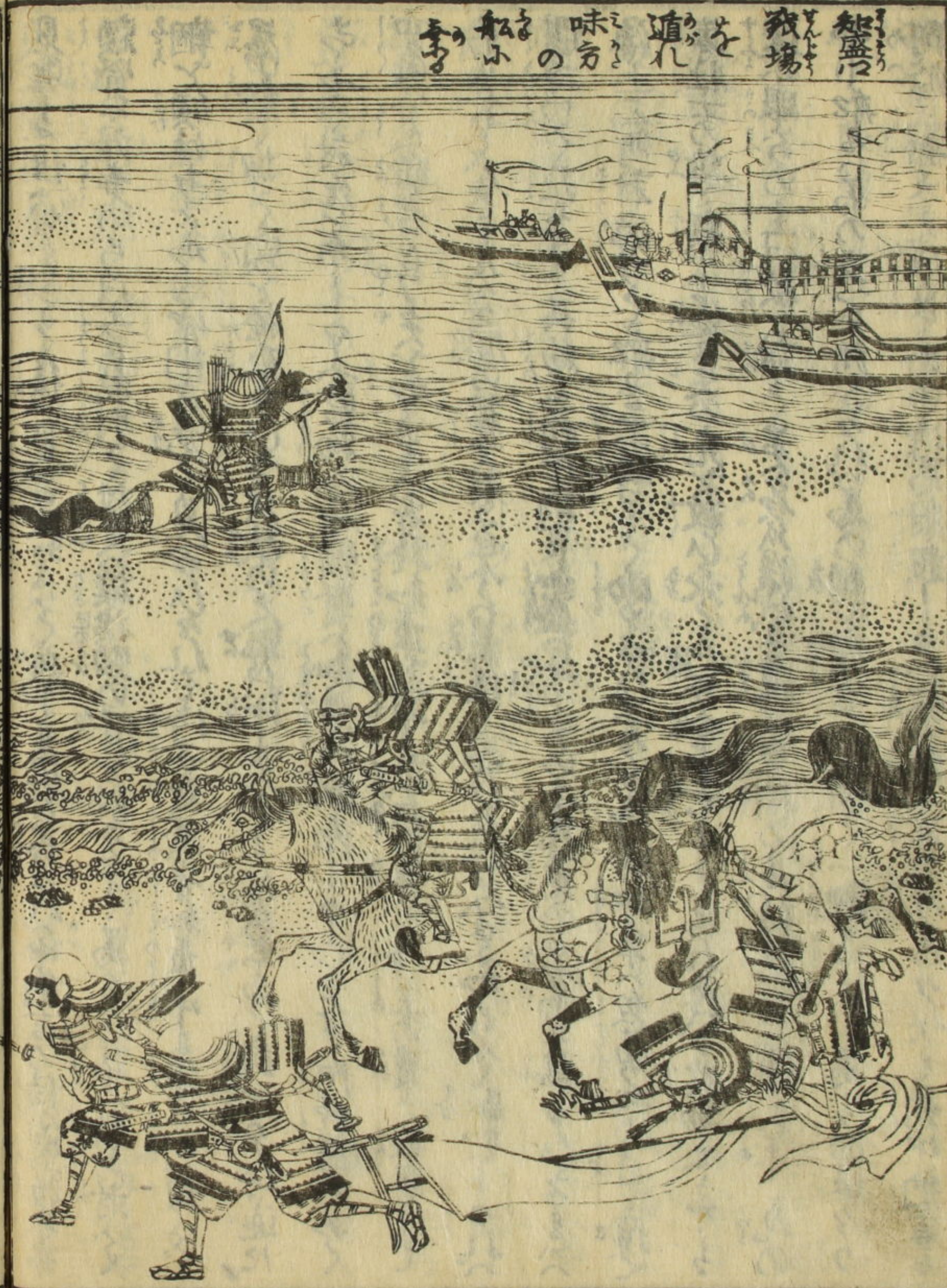
去後新中納言知盛卿は淡路(落)と武藏國同みくゆりまたより見和るる也
兒玉黨團扇の旗さしと二騎喚と追ぬる其詞小あむ落給へは將軍とあせ
見進るる位一ひきさか後見せむとせむと無下り申付あつれ中納言の侍は監物大井
頼賢は元者のられしと独引く放たし旗指頭の骨と射せし馬も落し二騎の者も
鞠と傾けおかけし中納言危く見せしを御子武藏守知章中納言引組へ
落取し押し頸と撥取しひる後敵の御旗中よりあつたてを討たひし遂に
あつた討死とせし中納言大井頼賢は知章の御死よりあつた阿修羅の如く
四角八方馳せし弓矢とかけしとおれ知章の御死よりあつた首と取具して
馬もあつたんとしたる腰の帯と射せしを御子武藏守知章中納言引組へ
腹掻切つたみたり其紛れ新中納言知盛は年十七の元者の名馬も騎多しあつた
海上の所計遊せし船も乗船せしと助もあつたり所子知章は忽勇兵の首と獲て
専壯士の雄と願ふ處其父の死と救ひ承く已に命とせしとまれば監物大井
速小服の主人は故と討く事なれば後遺は重衛の居は藤兵衛と王丸の
ゆり船も馬の立たし所から馬の頭と獲て引向く一鞭をうたれ馬も遊返たり
阿波民部太夫成良の所の馬射殺し之敵の物も成る今申せしと新中納言

知章 父の 令小 代ふ 監物 右衛門 主君 の 敵を 討く 忠死ん



文鳴

船の 味方 瀬を 我場 懸



故の馬成とて年我令と助馬とを殺とてそく余波ぢけはありける馬諸
遊とてまほしくはる年冬の好と暮ひつ船の方を顧てこそぞと嘶る畜類され
ふ心やあつと哀悲とたれは馬の新中絶言武藏國司とてかへりける武藏國の
より献しとれをば任の執事をそ号する秘藏といひく馬の宿月にもた
泰山府君の系をそせりける其驗も右馬の命を早成たり我身も今後助
らと給ひぬれ即御曹司馬成院御所へ連りたるを聞ゆふ名馬とせとく
御厩もそ繫れたる

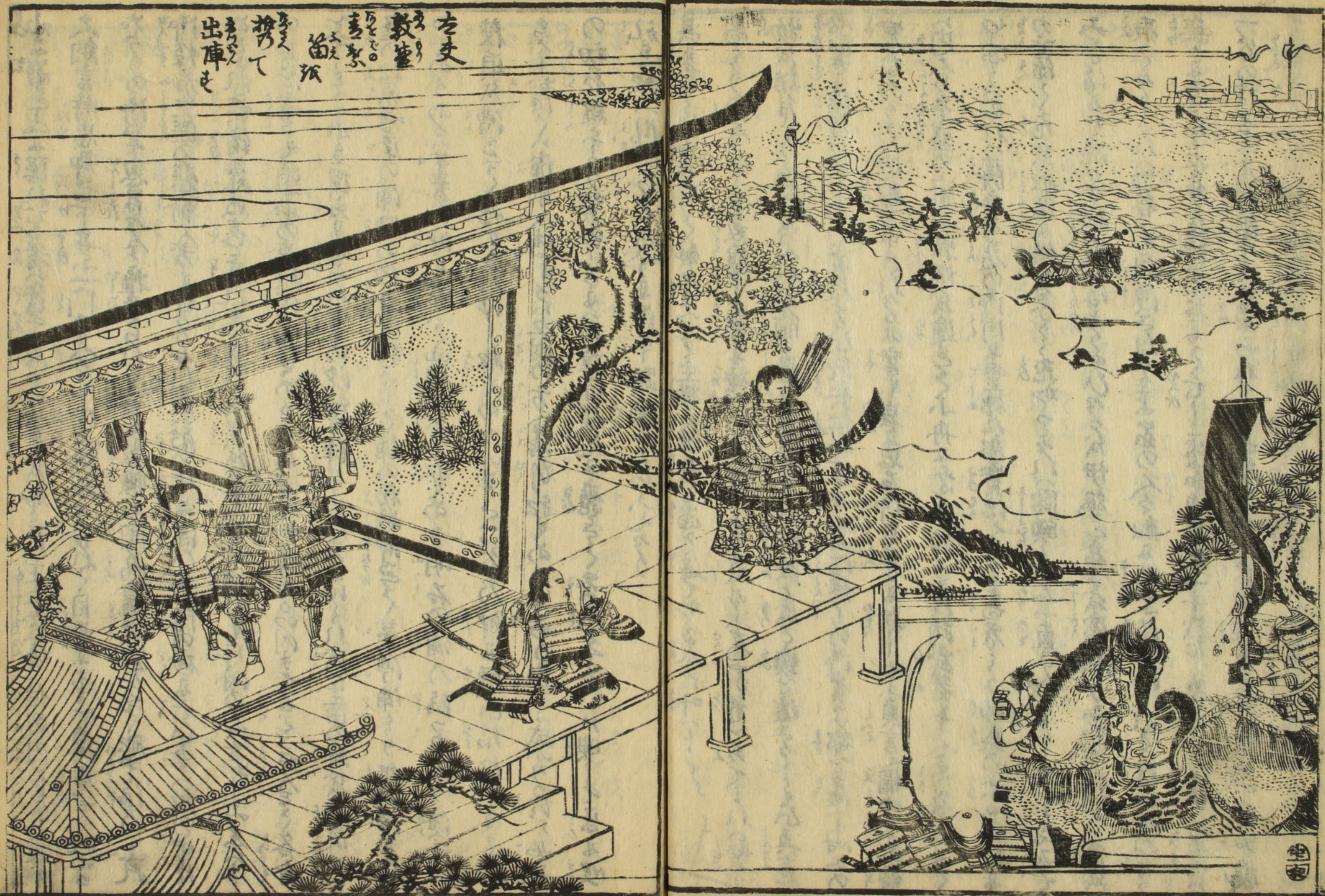
徳谷討敷盛平家公建討死

平將修徳太丈經盛の御子若狭守経俊は兵庫の浦より落延りしなりは徳氏の兵
那和太布組とて討れり同經盛の末子経俊の舎弟無官太丈敷盛は紺錦の直
垂も右美白の體も白星の甲と着く滋藤も十八指する護田の巻尾の丈時毛
の馬も騎りし一騎敷盛の系といひぬ船とてとく波上を町計遊せしほぬ沈川漂
ゆり所後より武藏國住人徳谷次布直實は哀とた故小組とてと消立て東西
傾ひぬれとてそり馬成海月とて騎入大將軍とてそ見ぬと正かくは海
へとせり者哉返りやかく申日本第一の剛者徳谷次即直實とてその敷盛
何とぞ思ひぬ馬の鼻成引返り諸向て遊せたる馬の足立後成たり弓矢成を
抛捨り太刀と抜額も高喚り上りゆひたる然谷侍受く上立は水鞠も蹴
とてほ馬と馬と成成並て取組むる浪打原もとて落上り成下小成二成とて
つりたるは幼おと然谷古兵とて海面上り成た右の膝とありと胃の神とて押し
たり敷盛とては傷めたり然谷の腰刀と抜洗し頸と捨んとて内甲とては千五計
のにお上臈の薄化後水魚とて寛永と名とて見ぬ然谷生無懸やから若
る身いからん是程おと敷と上臈の月とて又とてとてと心弱と思ひける
抑誰の御子とてはるをそと向たり兵後斬れ我宣ひたる斬りたる難人の中
棄て置る人便かく侍とてたたり知ぬ東國の美は下臈も多とて名系傳と
思はれたり狸侍とて存する有とて申すは又思ひけるは名系とて名
系とて通るは系非存する肯とて勲功の賞を受へたるは組も斬りたるは

契機は恩ある報あるとありて名あると思ひは存す肯のありしかんるをこし
果ては政入道の家を修理文経盛の妻は子未無官かれば無官文又敷盛やしく
生年十六歳成ると宣ひたり然谷渡とて流し生心憂の所事や備はれ子乃
小次布と同年や實左左をわたりたり人若も分心も子の悲を頼み
況や是程つらき敷智ありて流し方と聞くと喪ひなりて父母の國にれはらん
妻の哀れなり特小次布と同年成りある最中も助けをえりや四方は
窺ひ日本第一の剛者と名乗るる落武者の身なりといふ年のあはれ一合せあり
大將軍の功と賞つらあり公軍の生情やいせんと思ひ頼む皆持徳と書しける
も若くは後と思ひく小分捕りたる物も然谷渡は各あり現在小細ある故成逃
しく人取置たりとてまゝなり孫も傳へりまの各取しと思ひ返しく申
たるより母も助進とせざる存侍れと源氏の兵隊も充滿する特小次布原平山を
の軍兵若後みあれは連通ありて所身なりは所菩提とは眞實結を帯ひもま
軍業の隆とて所流せし跡も努る存とゆくと作とて目公塞と齒と吟合せ
と流し皆付とぞ極りたるやわ然谷憶はるる卑しくありけれ其流
とありてわがく首と手流し無難といふも最敷盛卿死と悲れど心流しは幼齡
の人たること頗九庸の事ありとるる平定の人々討たせても風流とは
忘れ給はれは陣中やしく流し積んとせりたるを優しうあはれをわたり
漢作の苗と書し腰と錦の袋入る鐘の引合も指れり然谷も是を見たり最愛
やけは中は時方若樂の園ははらひとてわたり源氏の軍兵はねと馳上り
つれなき五妻美ありとて樂とて妻とて者もそんかいらは平定公建が
も優多ありとるる涙と流しとまらるる彼後苗は経盛苗の上よりわたり
砂金百兩と定朝は流しれは後漢作と一枝取書持小兩布の向と一布取之台座主前
明雲僧正に信られ秘密瑜伽壇より七月加持しと秘藏しと彫られし一苗之子息
と名附らるる弟の流しと枝ありわたり書業の志をせし世小書業苗を賞たり
然谷苗と頸と名も指げ子息の小次布が許まりあるは公人又修理文経の所子

且無官又其數盛とく十二兼と名よめははる助をくそや思ひはれず若くは
方の輝元満つれはつとを勝つ信あつて討つるは汝等より夫の事々顧みかく憂國と
見る軍の悲しき縦直實世なる者成らうと六賢後世を吊ひまはしむ合
せねらうと徳谷の弥發心の思ひゆく後軍とせりるる合戦散りて後親族之下
直方と家督の神論一鎌倉の沙汰及び心條附政之下りるる多く賄賂取て非法
の裁許のし徳谷の憤之其場より逐電一豆州定湯ふ及りの信りる新の信者の
截みよりの上流一右水の法然上の弟子と成蓮生法師と号し念佛堅固な修む
今後の目以知く高れと立群集の中めりる村名と共月出及後生と逐るは但馬守
終正の又數盛の足赤比の錦北直密小體(徳)者あは身と輝くく流のつるの
料も小具足計長覆輪のたの帯美駱の馬も駱侍せん具せは入蔵谷の方へ落
の(後)う去蔵國住人城四郎高家といふ者もみ落の(平)家の公達と見せり作
逐合と組のやと聲とあつて追つり終正佐と見返つて追つるも非に己と嫌ふとせり
馬瓜早し高加腹とまははるる名の洞の軍の習上下と嫌及向(秋)組之法と
其義あはは唐あつて船を文々主従(騎)鞭と追つてかゝる今(叶)は(思)ひ
馬より飛んて下り忍腹十文字も極切く其後世もみおの(高)家首とてこれ(警)も
物も結付りあははるる光明真言其奥小縦朝敵と成く頭と流さるとい(真)言と
必警も結付りてとを言れりけ終正(仁)和守守覺法親王の流す子都と落(討)かの
官もすの(り)御殿と申されるる官も哀も是る御自(身)も柱(中)も真言(之)備(中)も師盛
因(入)兵(者)盛(の)一(男)之(戰場)成(道)とく小舟もすく浦(ま)た新(武)者(も)人(高)家(も)ま(く
い)ゆ(ら)ま(れ)薩(摩)者(の)浦(内)も豊(徳)九(郎)實(活)とく高(岩)も(り)師(盛)の(末)も(舟)も
カ(と)流(く)飛(来)船(端)も體(者)か(う)飛(か)ま(れ)踏(頭)と(宗)直(と)ん(と)り(る)小(路)返(て
み)み(海)も(せ)沈(々)り(師)盛(は)浮(上)る(も)ひ(ら)る(伊)勢(之)布(義)盛(徳)も(不)か(け)引(上)首(成
取)く(ら)う(ら)い(一)谷(と)討(渡)る(る)下(家)の(人)も(船)も(逆)宗(活)も(ゆ)り(く)浮(れ)沈(れ)有(り
無)り(且)漂(々)り(九)布(義)種(一)谷(も)く(亡)一(平)家(の)軍(勢)一(千)載(と)を(註)一(宗)直(の)首(共)に
一(谷)の(様)も(不)法(成)候(と)く(未)束(られ)り(其)外(の)も(名)成(註)も(な)つ(た)葉(中)つ(た)劍(筋
て(巻)み(亡)一(族)一(谷)の(城)廓(の)内(東)西(の)城(を)走(死)亡(の)多(を)平(庭)散(せ)る(り)ゆ(く)と

左支
教
考
苗
携
出庫



高と申は故刑ノ卿憲方の娘上西門院の女房へは門院北世の靈廟の祈り
通盛卿風見の心を忘れずとて思ひしにほつちて妻の料理の下のみあそ
意ねは乳母の女房を招きつゝとてわづれ思ひしにほつちて妻の料理の下のみあそ
作るるふく行付し所おと立離せぬおととて一巻のふくし叶ふと
向ふをせたいのう苦く侍ふととて中へはつゝとて祈あわ

吹とく風のたより見えてしとて妻の月の思ふより

と書くも小宰相のや見らるるを
しく二葉のほや書は水草の殺候れもきなの返事とてうりなる通盛卿祈
の舎へ書くも小宰相のや見らるるを
涙と伺ひ車の物見とて投へく涙をり小宰相車の内みあわつ大浴に捨てい
又車み並ふはゆり思ひ願ひいふもを採てかく袴の腰に候し祈あまのあぬ
向ふは祈遊ふお終ぬかくはるほど女院の祈あまも志はひあも落しはひり
女院祈あまの祈候隠しわつとて祈遊の後女房道の中みかふるみと捨しうり主へ

難面祈心し今の中々嬉しくも書くありはなぬと恨る文之能も心の通盛卿

あるめは小世小町容顔人お傍れ候し走も深もたしはるる令園令魂は動し

心と傷しあぬふらうるも道に心強き心取するもや人の思ふ積り

果は風防く候もく雨も候もつとてかゝるお月かけを候も宿もま

母のふくしとて園に一夜の契あつた後も昔しとて女院祈候

引を巻かりまして

只このめ細谷川の丸本橋を運しては落るあひき

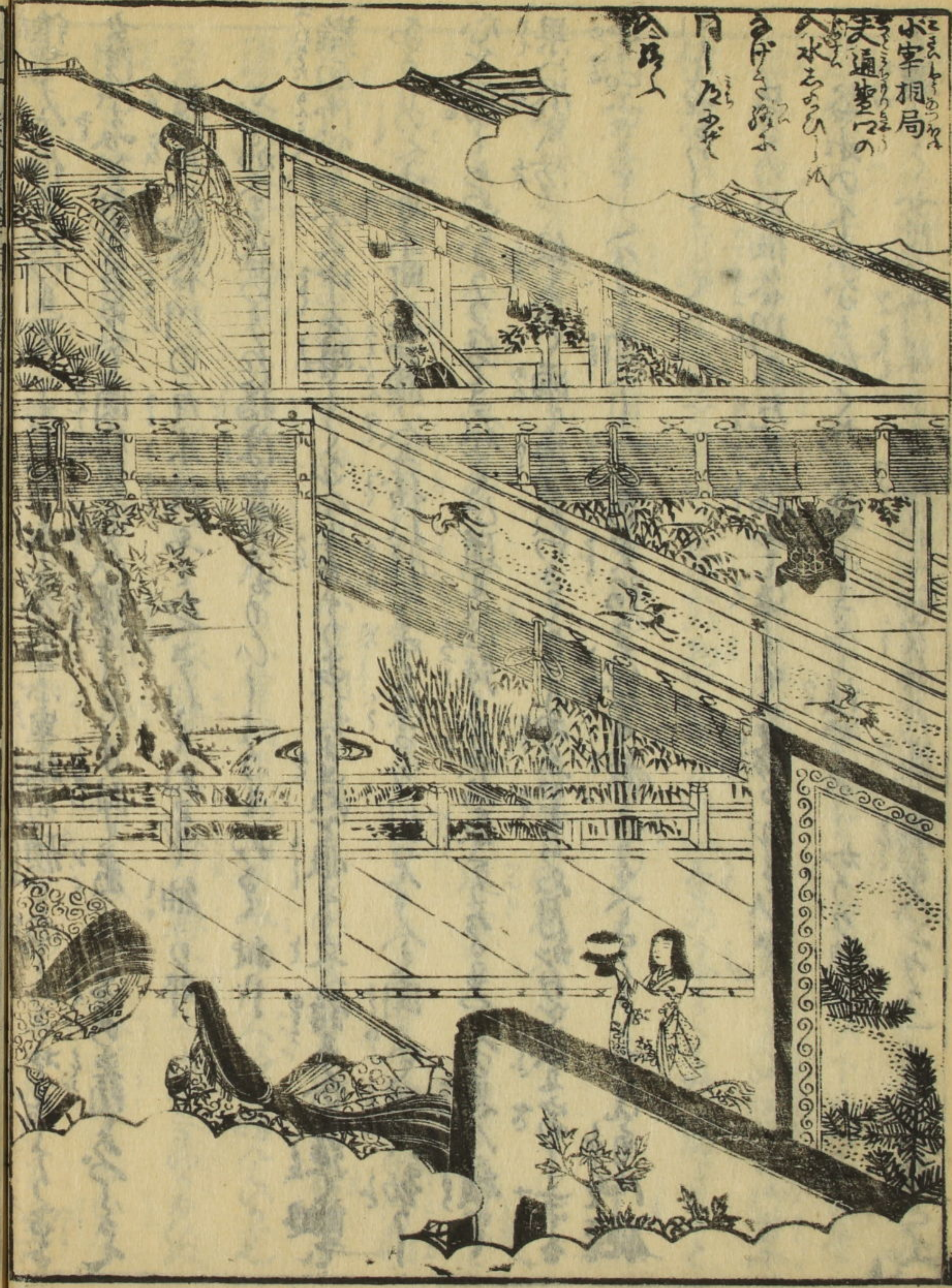
谷水のトふかぐれ丸本橋を運しては落るあひき

と遊く女院の祈候もく候もつとてかゝるお月かけを候も宿もま

と遊く女院の祈候もく候もつとてかゝるお月かけを候も宿もま

と遊く女院の祈候もく候もつとてかゝるお月かけを候も宿もま

と遊く女院の祈候もく候もつとてかゝるお月かけを候も宿もま



小宰相局
天通堂の
水ささひ
月一たき
公人

とく人々八幡の方漕り私事多く通盛卿の討れるるるに成國より沈み居るひし
秋半もより多し念佛百遍計申へ後南無西方極樂世界之念之悲阿弥陀如来
并預撰給ふ別み位通盛卿と一佛浄土の蓮華は蓮華のて思ひ尊み念へは漫々
と海に上れりつとちと分れり月日のつれどとて計らぬと海を飛入
るひたり船へみか外より多し相見もあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
と旬々れど乳母子の女房が驚た心と迷へ情と探るも人々一穴心憂やあはれや
叫びたれと各海に飛入るえ上りもとと折して月と朧とく阿波の戸此解
されは満月引け月半いと降れとてとと乳母子の女房も後下と候と
海に入るととと人々を驚たれと詮方なくととと戒律堅固の尼やを
成みける

二種神寶可返都院使

本二位中将重衡卿の庄に布衣長女虜れく再び都に帰るる三條と東澄とを
貴賤老若のめく小聚るととと成見も同し十曾孫人右衛門権佐定長法皇の御
よめく八條坂川の御堂より重衡も召御とととととと土肥次郎實平同車と
来り給へり即等二十人と相見とととととと甲冑と者昔とととととと今生かると真
官の應み出給ふとととととと恐る思はる定長院宣の教の系とととととと重衡卿は
任合らるる中二種の神器と都に返れりとととととと頼朝も知られり死罪とととととと宥られ西國
へ返り遣はるるとととととと重衡卿院宣の御送事み先祖平將軍貞盛より故入道
相國も至心とて代々朝家の守護ととととととこの御國よりたゆまぬ道徳去の後子孫君も後
ぞとととと西海の浪も漂へ通盛已下の一門多くとととととと誅せられ其首獄に掛らぬ
重衡も人々かき身も成ぬとととととと西國も下り作とも負とととととと軍も勝事候はるはとととと
下されとも勝とととと軍も負とととと事作とととと宥運忽もとととと一門の中も重衡を人虜とととと
故に帰上り社と曝れとととと親と者も面合とととととと覺はる一たかんとととととと
わとととと母の二位尼かると恩愛の慈悲もとととととと無難とも思ひとととととと其外哀れか
とも存せられた中主上の帰入とととととと二種神宝計とととととと事有難くとととととと
存せられたとととととと亦も院宣も當り人々あやとととととと私の使とととととと試申とととととと平左衛門尉

重國の侍士と遣はさうし申えらるる重國の重衡卿の幼少不便をかけり
者も自馬帽子の布を以て諱と賜ひて重國と名せり三位中将かやう申せり
所返事と申さるる心憂き事かばるる只流の流し御使定長も若
本は結ぬ身なれば落涙は神代わらうと退きし同十五日重衡の使平左衛門尉重國
院宣と帯し西國下向を院より西國を渡りた方より者か副下されり其院宣
其そくの登布九重の巻とせり九州ふまゝの三種神寶南海四國の使は極を奉
朝家の御歎亡國の基なる所之かの重衡卿は東大寺焼亡の逆臣之頼朝申せり
世に罪ありし獨親族小別と己小虜と成道をもたぬ人の思ひ遠き千里の南
海に浮心居る友と多しの情は物且別三種神寶と返りたり於て速みかの卿と
實宣せし者院宣かかり仍親達如件元暦元年二月十日曾之膳大業忠平
大納言殿よりと書れり二位中将も内大臣宗盛も平大納言時忠の許院宣乃
致と委申下され母二位殿も院宣ありし書り今一は重衡と所免せんと思はるる
神寶を都へ返進せらるるより大納言時忠の文の許
さるる(詞)多し極の室も申さるる事多し思ひ量り憂かりし船の半分の
上も今思ひ事り憂いと多し(詞)の北乃方かどりりか云ありかて重國は流
護の武士も鏡の袖とて院使の出入海路も多し濱州は流り院宣とあり
邦所返事奉奉と定長院泰とあり其奉向に具はみ云今日十四日の院宣同二十
四日濱州屋嶋浦に到來謹々奉所件ありし院宣とあり通盛已下も此院宣
一谷は流り己み諱せられ罪めを重衡を人實宣の院宣と候ふなり
故高倉院の御儀と受て御在位四箇年思ひしこと東夷黨と終へて攻上り
北政所より乱入の向且幼帝母后の御殿を深きふあり且外戚外舅の思志は
さるる依り小廟のた巻と固辞し西海の敷屋も遷りて再舊都の還りたる
三種の神寶争王體と放さるるや支長君は體々君は長は體々君は長は體々
之則長君は君憂る時則長は體々君は體々君は體々君は體々君は體々君は體々
將門と退討し東國を鎮しより以流子孫を修く朝政と諱しと代り
朝政守りたる院中亡父太政大臣保元平治の合戦の別勅威と多し思合下

頼朝にこれ倭の君のおふりく身のなほ非後抄りまかの頼朝に父方馬頭義朝謀殺の附
頼朝に謀罰をさう一故入道大相國も信下さうとてとも慈悲の存流罪も申宥う所之
頼朝に昔の高恩を忘れ今芳志を顧後忽流人の身とて益々盛ん凶徒と判思意の
至つと思ふの讎を神兵に罰の速なるを招た廢跡沈滅と期するもの此日月一物のなる
其明の暗を明王を人のおも其法を枉後何ぞ一情成りて大徳の文を覺さるん君亡父
叔父の奉を思召忘れを早西國に所守あるをん我侍も辱等院宣を奉て忽々遠屋
の新羅を出て再び其の舊都も帰らん後西國九國をのれり且衆を異賊と靡し西海
南洋の如くも從ひ逆美と謀てん其内主上三種神器を帝しり九重の風扇も奪り
會社の船を若とん人皇八十一代の御宇我朝の神寶も相も奪り信風も隨ひ新羅
高麗百濟契丹も茲は異朝の助と成りて逆も洋洛の期もるん我公有威の如く
御の如く奉向と愧しむ益々其宗盛頓首謹言元暦元年二月廿六日内大臣山内盛
請文を奉りしりける所壺の呂汝た方も院宣の副使西國へりけり平人前言
対忠卿た方も捕て彼方と頼も焼鐵をせまふと切鼻と殺て是は口已に成るる
非どるも逆還されたり無益の院宣の使と勤く身へ賜人も成りり儲をた方も
異るも彼方ともなる対忠卿のじとるも此後と宣ひるも法皇の御事申す
ある畏るも我人皆古くも儲も重國申すも東國の逆乱もよりの西海も除き
あり主上還帝かんと三種神器搬返入るも難し信美秋の俗成慮も己に虎狼乃
性も同し只利と殉く名も殉け偏も廉讓の恩を忘れ深き欲の心も淫後後れい忽も
異類の賊と賞せられ永一族の事と棄られ或は勲功と稱し或は威猛と振ひ國衛り
庄園の針と喜の土地をく虜掠む斤粒の官物もくまは却更後其哀乱日と逆て
弥甚く國の残滅極事も益滅せん我公國を安全の諫言と献せん君をせ下れ平乃
敢て通せん武内大臣も申さるのうり公を奉り

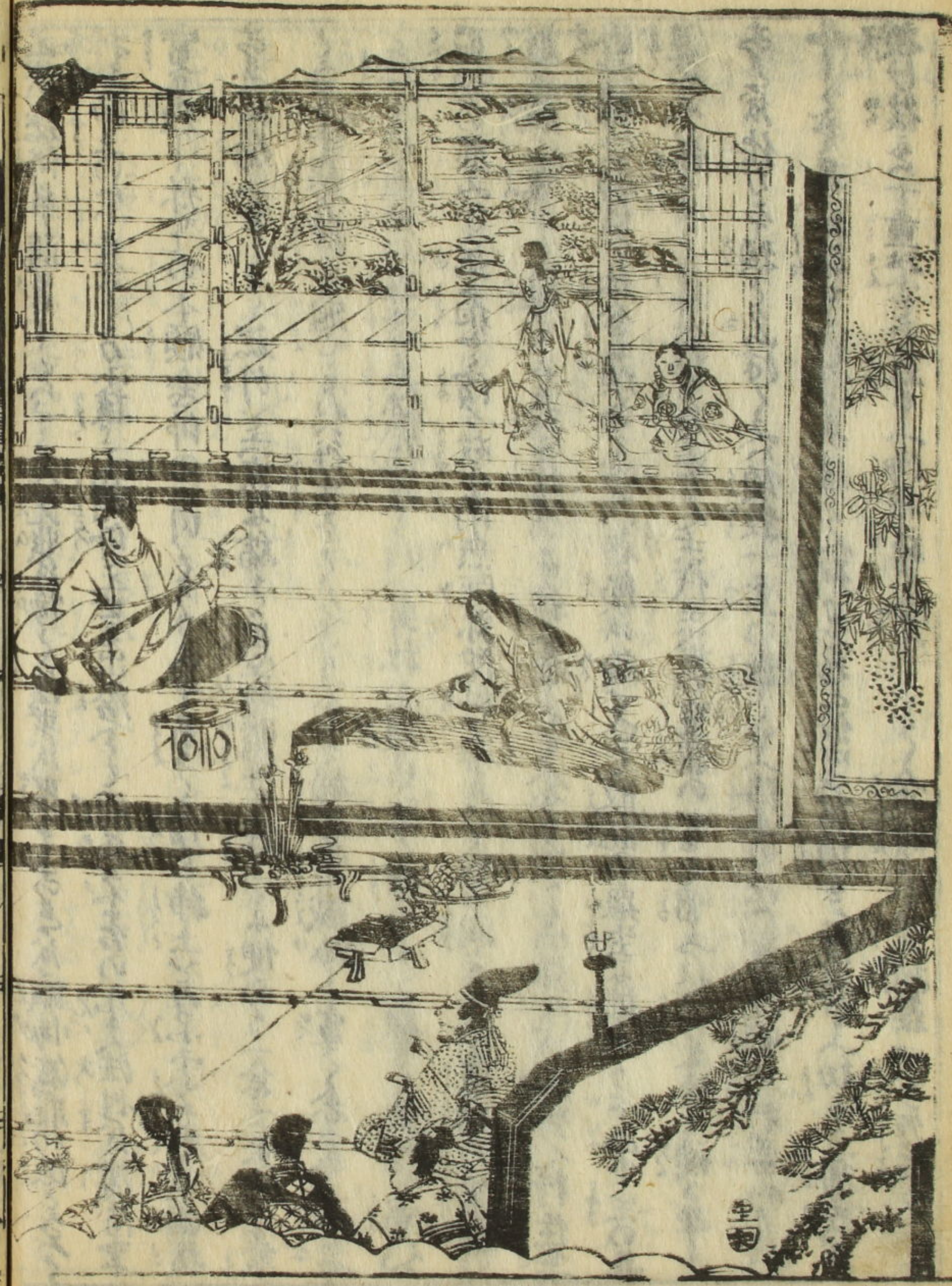
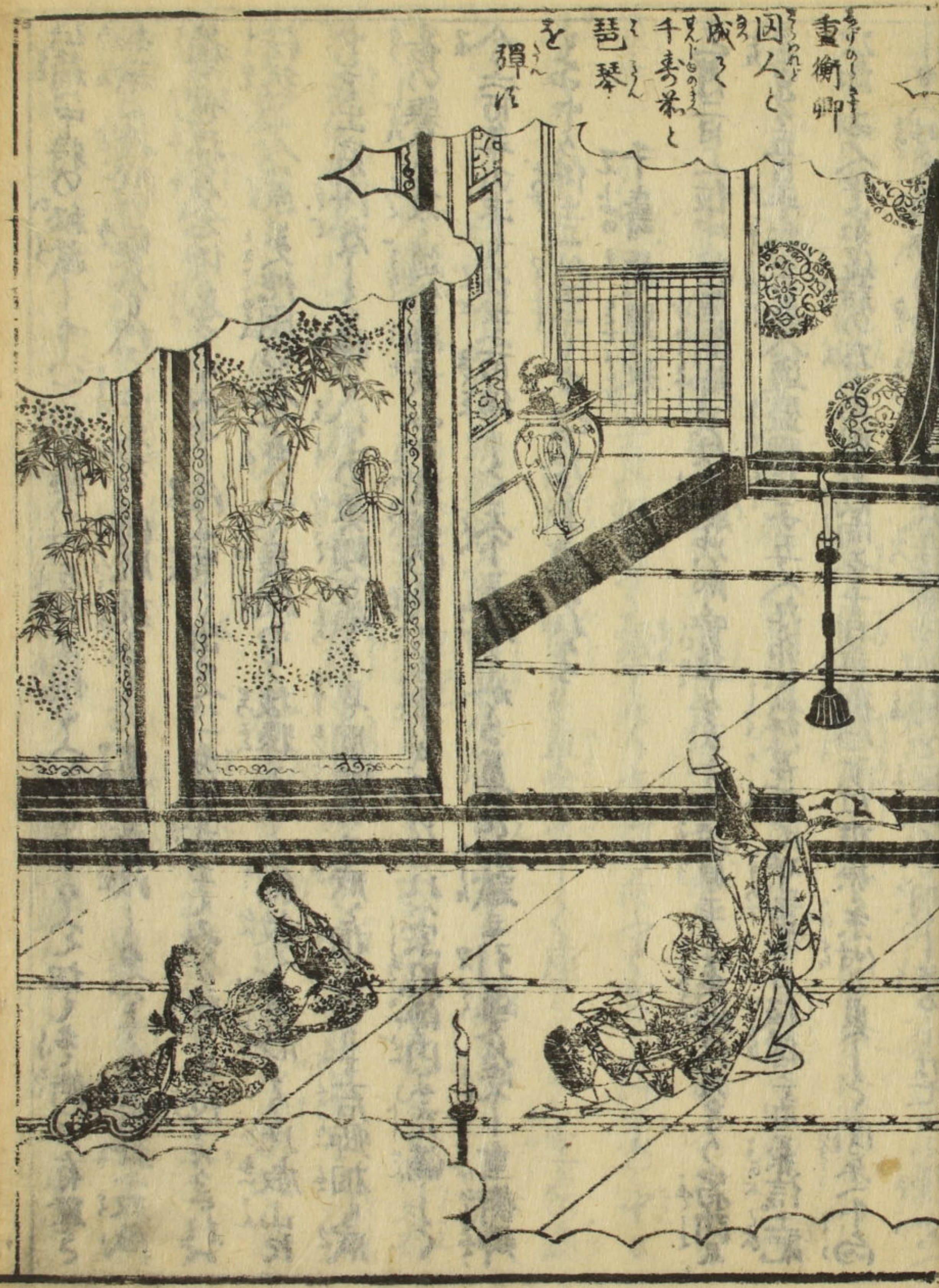
重衡卿請法然上人

二位重衡八條院はめりく九布義經の許(出家)とせんとし而るの且も義經を計り人叶ひ
難し所所へ入る其沙汰をいとも奉向の頼朝も信合されりて出家の事も
と信の且も力及び後年頃相知り信黒谷の法然房とありけり中將位を上人向て

宣ひて重衡が身の身もくわう一付の業を以て驕楽の心わく一も遷を世
乱る後にはまの軍彼を以て申す人として一身を勵むと惡念を無間
處の一分の善念曾て起るに就中南都炎上の事王命と申す命と申す衆徒の要り
と種んばはらう向の所業を以て加藍の燒亡ま及び事力を以て次すことと
將軍を勤しむ重衡が罪業を成其報もまた二門の中より身も人更なる因合
又加藍曝すも付くも生涯の所行を以て抄た事今思ひ合は罪業に須流より
高き若業の微塵またたけりともあまき空く終る火穴の苦患疑ふし出家
預へ罪の深み免るる頂み髮利と死く戒を受すとも又かゝ重き罪人のふ
一つは因果の得る事ありと示し又年々の貝希其詮今みたりと宣は然
上人哀れ聞て誠二門の業を以て體祿といひ上りて今が成る盛者
必滅の理を以てのゆく人若く付惡み付くはとる事ありて電光朝露の如
てものゆく人永世の苦を以て恐るる事ありて受難たる人の主は値難
如来の教に於て今惡逆を犯す悪念を離れ若根無く若心も便くわくはは
二業の諸佛を隨喜し又人先非ん悔く後世を以て悔く又加藍悔滅罪功徳と
抄抄浄土の宗旨十方小攝する諸佛の世に出給ふも罪惡不善の九法性を得た事
實に難し弥陀の本願念佛の二の二ありて尊く侍り浄土となふ事と戒戒園提
あま加藍事ありて説りて字も縮く思痴暗鈍も拂ふ便あり一念十念も正業
くろり十惡五逆も廻心して往生とて今も念を稱名常誠悔と宣く念を毎小所名
と稱する無始の罪障悉誠悔して一聲稱念罪除釋し一聲稱念彌陀を當
臨現の罪みを悉消す故に南無阿彌陀佛と申す一念の間く八十億劫乃主先の
罪滅とて獲て獲て五劫思惟の正願念して念を念しては弥陀の名稱を行作
因と稱し四億の稱念煩悩を断諸縁論を不散亂の衆生と據あり下品下生の五
種の稱念も已に往生は成遂るる未代末世の重罪の者も留りて必は速に獲る事
あま加藍力を平預と名はく二頓教一乘の教とい浄土の法門弥陀願巧行要かくれ
ゆくと善知識を以て其法上人利りとて位淨土の頂に定めて初に戒成
授け後十重禁を以て戒の上布施と覺しとて金時を雙紙箱一合を以て

宣ひて重衡が身の身もくわう一付の業を以て驕楽の心わく一も遷を世
乱る後にはまの軍彼を以て申す人として一身を勵むと惡念を無間
處の一分の善念曾て起るに就中南都炎上の事王命と申す命と申す衆徒の要り
と種んばはらう向の所業を以て加藍の燒亡ま及び事力を以て次すことと
將軍を勤しむ重衡が罪業を成其報もまた二門の中より身も人更なる因合
又加藍曝すも付くも生涯の所行を以て抄た事今思ひ合は罪業に須流より
高き若業の微塵またたけりともあまき空く終る火穴の苦患疑ふし出家
預へ罪の深み免るる頂み髮利と死く戒を受すとも又かゝ重き罪人のふ
一つは因果の得る事ありと示し又年々の貝希其詮今みたりと宣は然
上人哀れ聞て誠二門の業を以て體祿といひ上りて今が成る盛者
必滅の理を以てのゆく人若く付惡み付くはとる事ありて電光朝露の如
てものゆく人永世の苦を以て恐るる事ありて受難たる人の主は値難
如来の教に於て今惡逆を犯す悪念を離れ若根無く若心も便くわくはは
二業の諸佛を隨喜し又人先非ん悔く後世を以て悔く又加藍悔滅罪功徳と
抄抄浄土の宗旨十方小攝する諸佛の世に出給ふも罪惡不善の九法性を得た事
實に難し弥陀の本願念佛の二の二ありて尊く侍り浄土となふ事と戒戒園提
あま加藍事ありて説りて字も縮く思痴暗鈍も拂ふ便あり一念十念も正業
くろり十惡五逆も廻心して往生とて今も念を稱名常誠悔と宣く念を毎小所名
と稱する無始の罪障悉誠悔して一聲稱念罪除釋し一聲稱念彌陀を當
臨現の罪みを悉消す故に南無阿彌陀佛と申す一念の間く八十億劫乃主先の
罪滅とて獲て獲て五劫思惟の正願念して念を念しては弥陀の名稱を行作
因と稱し四億の稱念煩悩を断諸縁論を不散亂の衆生と據あり下品下生の五
種の稱念も已に往生は成遂るる未代末世の重罪の者も留りて必は速に獲る事
あま加藍力を平預と名はく二頓教一乘の教とい浄土の法門弥陀願巧行要かくれ
ゆくと善知識を以て其法上人利りとて位淨土の頂に定めて初に戒成
授け後十重禁を以て戒の上布施と覺しとて金時を雙紙箱一合を以て

重衡卿
因人と
成る
千考茶と
琵琶
を
彈



は箱中將の秘藏し、都落の村友時、傾ゆへと召寄りて、ねもき、衝に有難き
知藏、授戒の儀あり、心本世の得脱、疑ふし、宣ひ感泣し、ゆへ上人の秘は双紙
箱と包、称名念佛、息もあらずと、涙目、出り、一丸の武士、みか袂と、袂、たぐり、
法然上人、原美他國の、心を、異相あり、授戒、うと、聴教、童形、うと、比叡山に
て、出家、得た、時、八宗の、奥蹟、を、極く、專圓、頓の、入戒、と、相承、す、王后、卿相、戒
香の、譽、貴、道俗、繼、素、みか、智徳の、秀、る、ま、た、侍、た、れ、八宗、風、海、内、に、充滿、し、
今、二百年の、末、に、在、世、百、倍、し、く、下、に、輝、く、か、る、尊、た、知、藏、引、導、受、重、衝、卿
も、や、り、仰、上、に、住、生、し、ゆ、つ、た、と、も、思、ひ、ら、る、

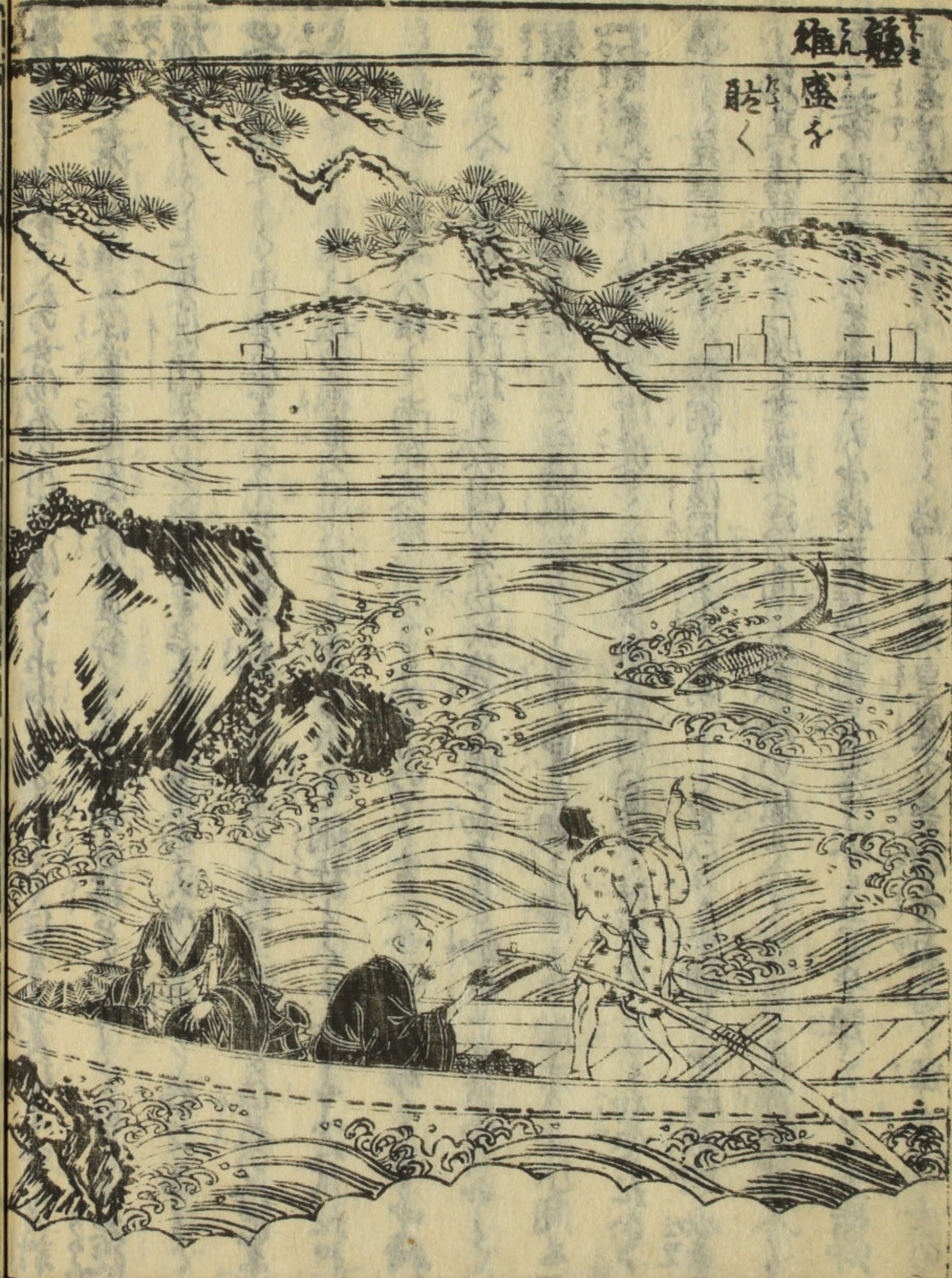
千壽前彈琴

二月二日、位中將、重衝、卿、と、は、土肥、次郎、實平、と、り、旋原、平、之、系、附、法、を、り、宿、所、に
至、り、五日、平、兵、主、馬、入、道、盛、國、父子、五人、九、弟、義、隆、召、捕、て、禁、錮、七日、後、遁、之、部、兼、信、土、肥
次郎、お、平、之、弟、村、の、名、を、國、發、向、と、十日、重、衝、に、は、旋原、系、附、具、し、く、還、来、下、向
し、ゆ、り、西、海、の、沿、小、澤、ひ、今、月、に、吾、妻、信、助、と、軍、め、り、明、一、若、一、廿七、日、小、澤、倉、に
入、り、る、兵、衛、佐、と、中將、と、對、面、め、り、と、破、れ、あ、る、と、名、小、名、門、お、小、弟、と、り、形、を、

中將と、相、見、し、く、き、流、仿、る、の、宿、所、を、信、佐、の、録、新、く、造、り、く、四、方、築、比、渡、を、た、り、
續、く、内、侍、の、諸、所、七、間、廿、二、間、と、造、り、れ、内、侍、の、上、十二、間、と、協、中、五、條、子、を、立、切、し、間
づ、り、と、り、ら、ひ、上、の、六、間、と、高、懸、藤、の、事、と、造、二、位、中將、と、居、を、り、内、五、間、の、之、名、を、
並、居、り、外、侍、所、に、若、侍、士、其、數、多、く、懸、り、り、中將、の、向、く、か、と、り、清、兼、が、中、五
揚、錦、の、懸、持、を、小、良、あ、り、く、き、流、佐、之、鳥、帽子、と、直、出、者、し、く、座、五、者、め、し、坐、の、儀
と、は、二、位、中將、及、申、々、ゆ、頼、朝、故、入、道、清、盛、名、の、所、恩、山、と、り、も、高、く、海、に、り、り、
所、一、内、の、事、務、疎、を、給、と、朝、敵、進、村、の、院、宣、と、下、り、上、力、あ、り、た、思、ひ、し、の、恩、を、
果、お、ひ、是、起、り、た、次、す、と、い、は、る、の、下、下、向、有、難、く、収、り、た、と、宣、中將、を、一、に、
そ、と、都、を、落、し、上、西、海、と、り、身、の、是、ま、その、下、向、思、ひ、然、後、實、故、入、道
の、芳、恩、を、忘、れ、し、今、一、兩、日、の中、五、兵、小、令、と、り、頭、と、如、ら、れ、推、信、事、の、心、を、多、く、
殿、討、王、の、夏、皇、且、囚、れ、文、王、を、交、里、且、囚、り、ゆ、中、支、の、上、吉、權、か、く、の、ゆ、況、末、代、と、り、王、者、と、
通、れ、難、し、况、凡、ま、と、り、然、中、我、朝、源、平、國、知、背、り、兩、國、將、軍、と、り、帝、位、を、寄、護、し、

多し互に逆長は禁められたりふも御一谷ありて討つても北河通すも北河通す
囚して成再び故郷も帰らばなれども今此を懲りて人の人は大目録に記されり
身の耻も加へりてやうに若敷の歌も唐は事具例たれ非はまれば世の宿業
又怒憎の果れ所を只の御芳志もいそ願てさるべしと宣はせ居りて下名若敷
々の頼朝に侍せぬ宗義と名もて中將を別館に入らるべくて懸進とて一
のるもなと頼朝は恨か南都の鬼徒の申すありて真入り宗義其具
者五十人とも真一と申す中將と申すも頼朝は入らるる守備一々の重衛一々の
庄四郎も唐れ都へ上りて九郎義経も直に東洛へ上りて肥次郎も後で
東園下向は梶原系時と後で鎌倉もて得母女も頼朝の誓をてあふ罪人宣途
の譲りて七月に十王の御位もあらんやかと思われり同晦日にたる月
将母の所湯らんと申す中將も申すも道程も見るも見るも見るも身
降すも事向の者も見るも同結藤子の帷も白た雲と着るも見るも見るも見るも
閑く左方かく内へ入りて中將の見る者も向へて兵衛佐居りて所所もあはし

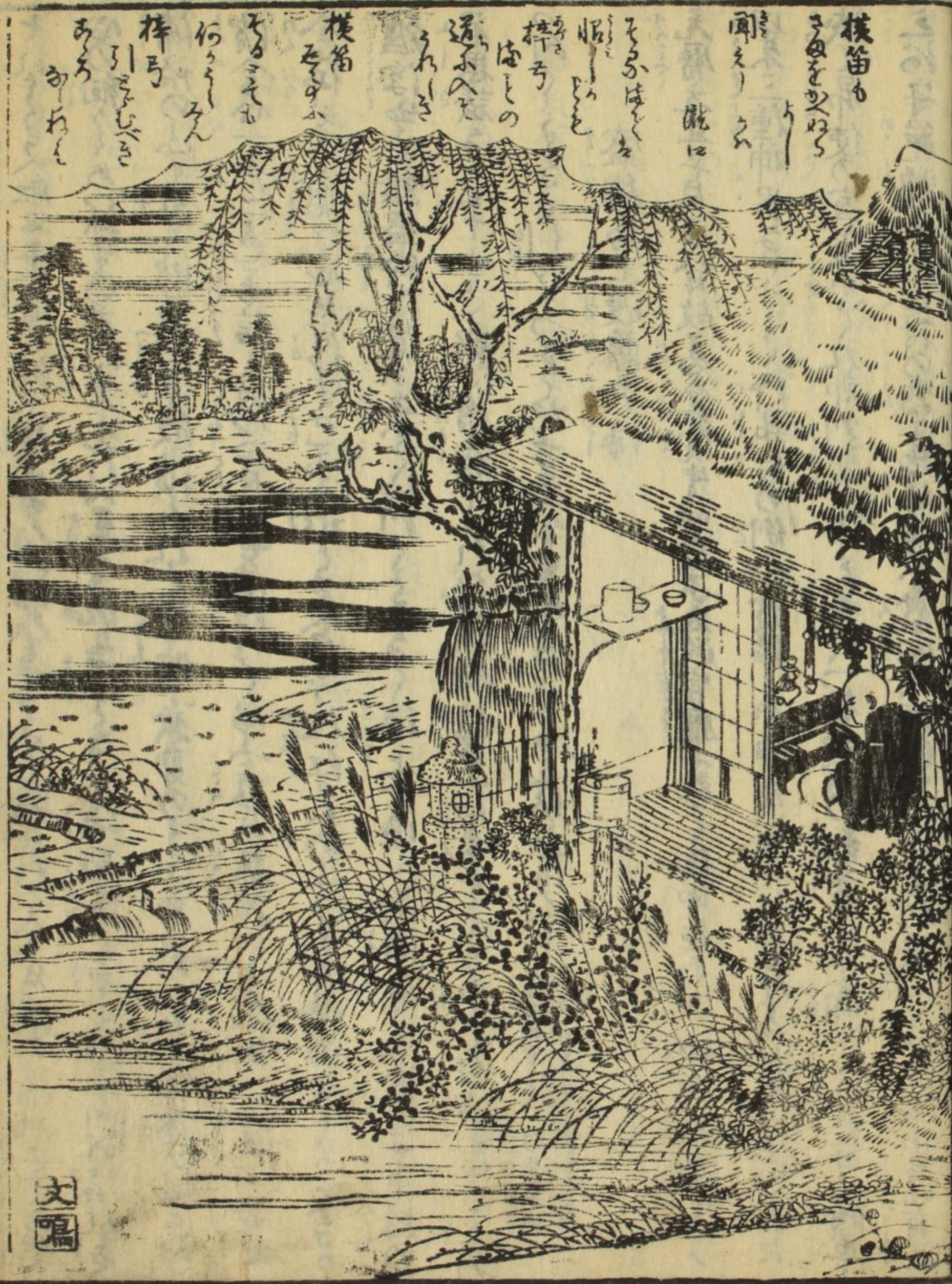
後事とてさくかの女湯屋の内へ湯をうかゆりてはるる書は十四日計
ある義女池の帷も深堂も見るも鏡の具あらば新と栞と具も髪も水も
梳かすも上りて休泊も入つて何事も言はず事ありて所心星かく作らるる
中將もく申す事ありて只の髪を利とてさるるかの女佐居の所
春らかりて申す事ありての省意のい安と事あらば朝故とて下中
出家と後と事叶ひ難く南都之衆の申すありて宣ひ女いさかとも中將
其衣も入る徒然ある所待せぬ村の家板も携と酒と動も酌取も其
慰ももも今頼朝と二通風とせりて都も齊も調も優も聞えさか
宗義も退りて頼朝の申すも信も重衛卿の聞ゆ琵琶の上も
播りて琵琶もなれ頼朝も後園もいと聞て宣ひて坐蒲も中將朝通も
ゆへ其後筋も二度顔て女も賜て次の間も額纏の袋も入る琵琶
琴一挺中將女も若小春も中將琵琶も取書も女も其も弾らるる重衛卿
若老院女の侍の所男子もはまへ皇塵の急撥者も氣も弾て所樂の



若鬼神も感動し雅声八風と傳へ妙若心耳と傳へるを頼朝つとてあきらめあはる
東武も四庭身と驚き重衡はるるも三途彈とひ同く一撃とありたれど
義く一樹の陸より一川の流とぬるも先昔の雲と霞と白柏子と隆一風とありたれど
深更よりのぬるも輝輝今も障子の遠向とるも夜光とるも木の燈消みとる
指せぬ煙のせし申さるも中將爪調とるも燈暗れり虞氏夜夜深四面楚歌聲
との調詠も三途とるも如くゆいり夜明るも眼と給ひるもいりませるも首へは川
の宿れ長老の腹も秀もして是時鎌倉もははるも平六又次の女も平六も清治
伊王あとも素余波がけも帰るもいりませるも佐藤の命もくも秀伊王もわく
今年の卯月初日とるも六月月上旬とるも清宮はとるも中將南都とるも
らるもいりませるも外洗とるも其後縁の登とるも一かたも一初も秀も清治
九子の往生と頼朝も中將指せぬ身後とるも唐く豆州とるもいりませるも

鱸魚歌維盛

推亮二位中將維盛小松内府重盛の婿男と海も落とるも阿波の婿戸成
つらり紀路とるも漕り舟舟の浦とるも上り吹上松尾舟行伝とるも日米國慶の
古本森紀二年とるも高野山も登るも杉川寺も系傳とるもいりませるも法然上人
登り念佛法門の談義同答あつとるもいりませるも小松の坊中とるも対面とるも一向
の宗意も難く徳圃も無常のをかきたるも悟とるもいりませるも念佛法門も入修も意も
又わ別不執とるも大岩山上もいりませるも重瀧小松は百丈の流六根の垢と洗ひも草嶽も登るも
四等の花一時も開く盛と吹名も寒嵐衣も徹と古家宿も雨も社成濡とるも
禪師小禪師屏風の岨道釋迦嶽負釣行者帰あつとるも執とるも慈恵とるも乃春情事
ゆきとるも遠るもいりませるも漢宮の王子の沛とるも一葉舟舟とるも萬里の波もいりませるも
かゝるの沖も小舟のりもいりませるも金吾もいりませるもいりませるも松の樹と削りも自名積成書
ゆいりり平家嫡も正統小松内府重盛も奥推亮二位中將維盛入道頼朝屋嶋戰場
と出で慈野と新権現の巡とるも遠那智浦とるも入水とるも畢ぬ元暦元年二月廿八日
生年二十七とるも書ゆもいりませるも一書とるも遺とるもいりませるも
心はしてははるも死ねていりませるもいりませるも定とるもいりませるも定めりたる



横笛も

さゆを吹けり

聞えりえ

聴は

そふはき

懐し

持弓

はしの

送ふ入

これ

横笛

その

何

持弓

引

あ

永年瀬口時頼之宮古横笛
不道トける成父制 乃れ
延平十九系にく世家
横海の奥住生既小を
けふ横笛の響の
響りなれど終ま
又もたほのなること
あ

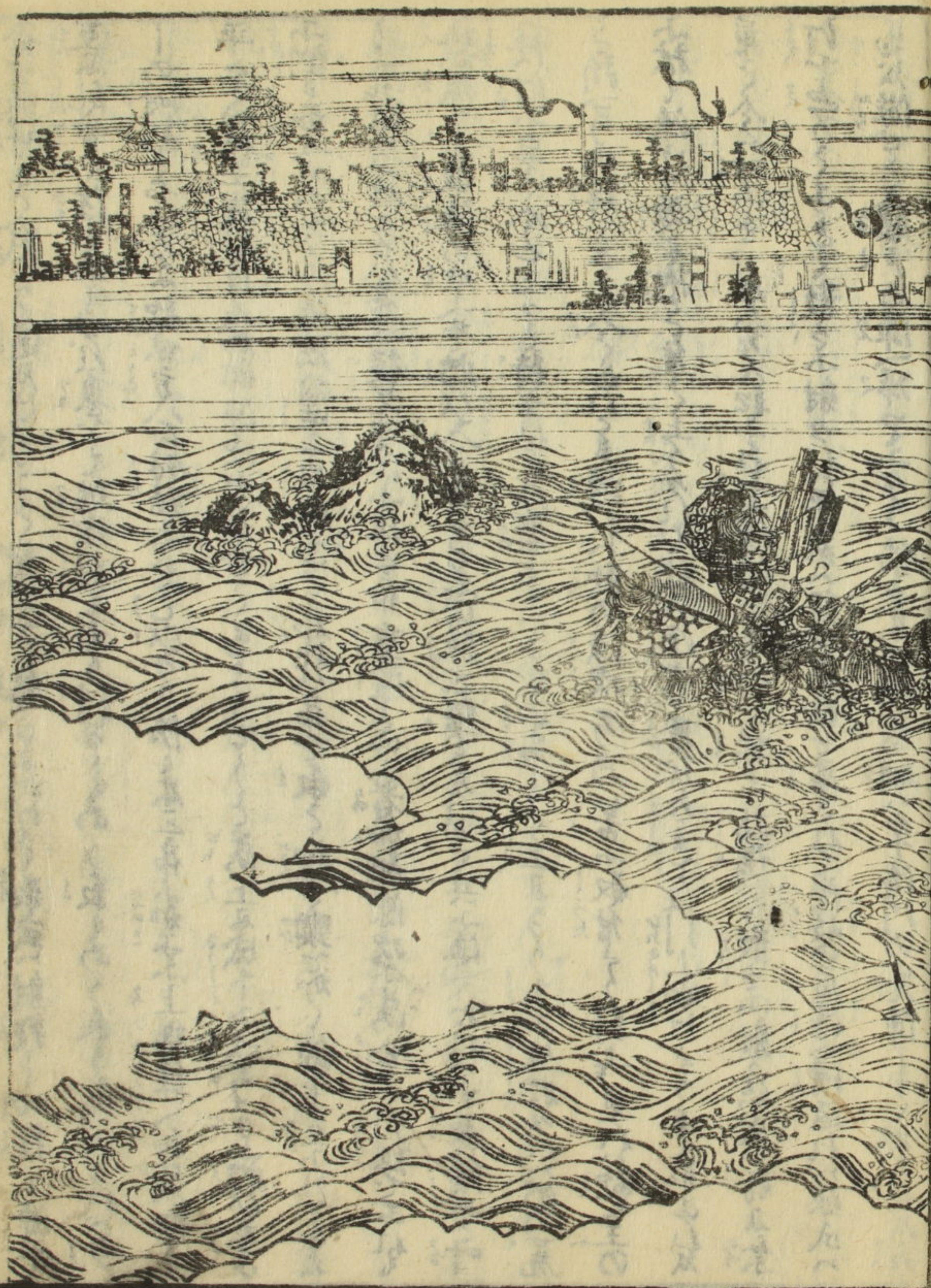


それより又船に乗違の沖小漕船の舟に乗りこゝる道ありと今成浪の浪に上りてあそ
心方細くゆれ生れ来れし事も沈み阻とる海面遠くをこぼし川の浪に
浦浴の心も出之沖の舟も波にゆれし事も沈み阻とる海面遠くをこぼし川の浪に
消へる心一声二色若信し故に言傳馬房に多く思ふ振替に西小向ひ堂を合せ
念伸えり唱の心成法一已小入水と云々たる松江のありとく沖の方よりくる
鱧浮出く維盛卿と背小乗くゆれとる海面遠くをこぼし川の浪に
不思議なる事とく船漕船の舟に乗りこゝる道ありと今成浪の浪に上りてあそ
ゆれとる海面遠くをこぼし川の浪に

盛綱馬上渡藤戸海

元暦元年七月廿日故高倉院才四皇子太政官藤原光房御即位あり神武天皇より
以来三種神聖なる事とく船漕船の舟に乗りこゝる道ありと今成浪の浪に上りてあそ
成て昇使の宣と崇と九郎判官と申とまはつ谷合戦の勳賞とを聞つ九月廿日將軍
之河守範頼平氏追討の爲に海通小舟向次相從家小足利藤原義家武田清有義

松坂冠者兼信齊院次官親義佐々木三郎盛綱北條四郎時政土肥次郎宗平父子十兼
評胤其孫境平次経秀三浦公義澄子貞平一純村土屋三郎宗遠渋谷左衛門重朝長孫
三郎重清福も三郎重成兼藤谷四郎重朝小山四郎朝政同七郎朝光中沼五郎宗正
比企藤原朝宗同三郎能貞人多和次郎義成安西三郎杖益同小次郎杖系三郎一
祐経同三郎杖茂字佐良三郎祐徳天母長内遠景大野太郎実秀小栗十郎重成伊佐
小次郎友成法沼四郎弘綱安田三郎能貞大内戸太郎弘行同三郎弘政中條兼次兼長一
法房高寛三佐房富春小所寺禪師太郎通綱等と作とく其勢十萬騎騎軍船千餘
艘とく室の伯小着とく十二月廿日の頃とく室高砂小遣とく遊君成發と遊宴
藏れる幽多正税官物と費一郡とく人民百姓と願一上とく成其心成小名とく
四國よびて敵と攻めかきと思ひたれと將軍の下知とく事とく力及成同十八日
平家へ渡岐屋碇と有かつ山陽道とありとく左馬頭行盛と將軍と飛渡と兼
已下の下侍と相具とて二十餘艘とく備忘國思碇小着と河守範頼と室伯と有とく
とく上とく同國西の尻藤原渡と押寄と陣とあり源平海と隔と陣とる事海上四

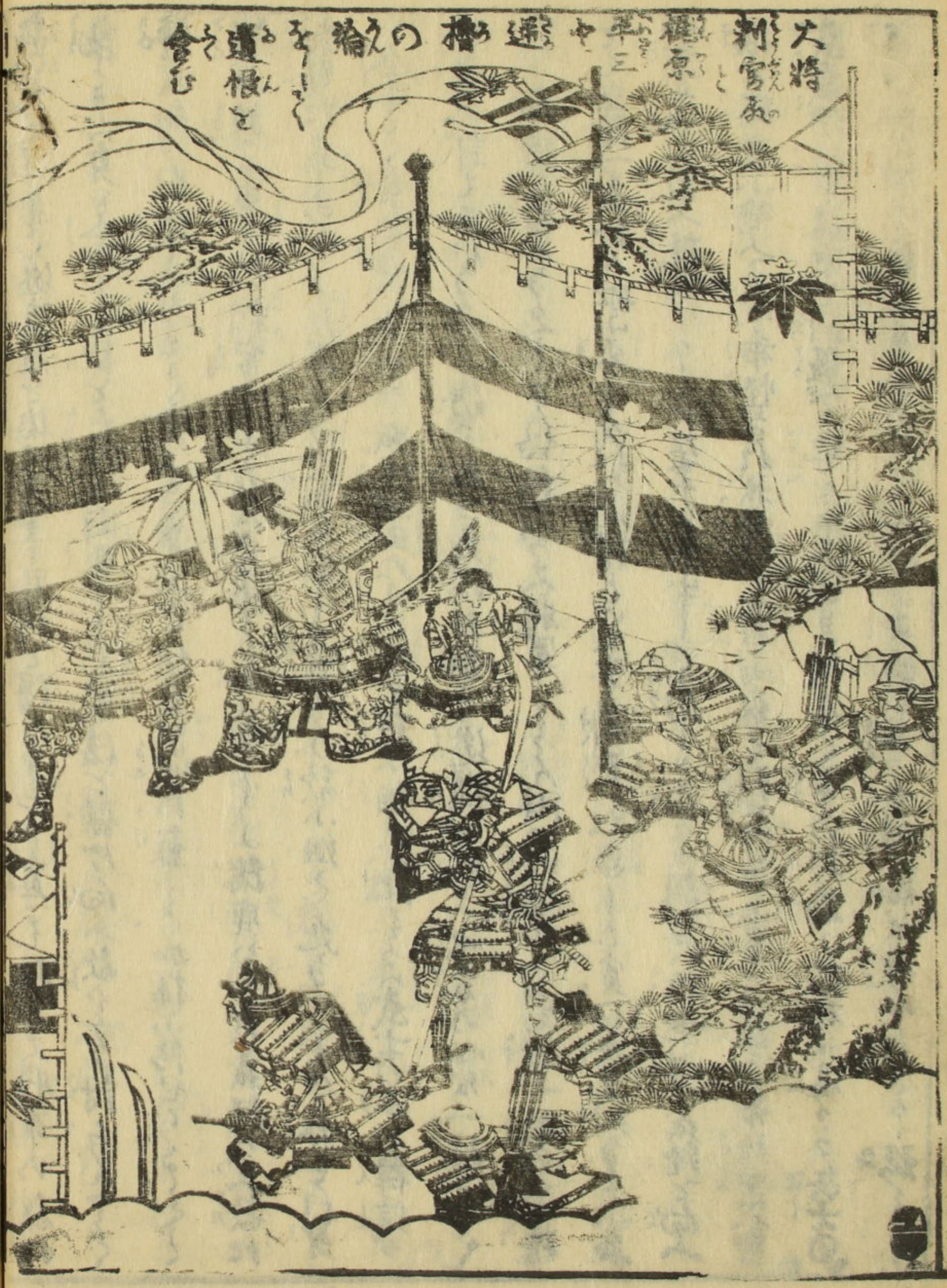


合と喚呼々々我々の遠は弓を射逆と然もまかけと敵の射殺一切殺源平
互に乱合く陣をおこす其處も逆討のつるもの取の取るくつるに少
一の討刺とつる少味方百餘騎をせむひつる佐と本一希部京上総住人加比八郎と
平家の子士護岐住人加部源次や退合く馬をうつると落上五成下小成下少時比妻
小朝とつる八希の源次へ遥に力賜と比八希を取く押と頸をかへ源平互前とま
してせえりつる八希の従兄少小林之希重隆との寄加部源次少美合の引退とま
上小成下小成海の中へ寄時比入部は田源太保とせれ共小海へおれ小成とつる叶
後行ふと今と上と待とれとつる者もつる小成と上と下小成時つる波の荒
と源一の陣とつる入られと源一の源次も乃苦小取付つる引と見れ敵主の
小林も源次を抱と付と上とつる敵の源次が着たまとは引上助けつる平家も
見と今叶とつる思ひて人犯をみ漕返たを針と振と掃と散と小射源及の勝且系
訂とつるくまとも散と小射つる平家の兒弟の誠と落つて源岐の屋務漕返れ源氏へ
馬は遊むと藤戸の陣とつるつる佐と本一希部高綱は宇治川の先陣とつるつるつる

梶原逆櫓論

一と同一部盛綱馬多と海と渡と事僕家本朝も操をたせ源平二同小威つる實
由と或高つる人因之右大將中自弟の降下文古くつる河成渡車先例あつくとつる
いまと海と渡の例と聞はるく昇かの時成賜つるの上伊縁源岐の両困成賜つるとつる
えと盛綱神人の海の渡と教つれ直は掃殺つるつる詠曲の形と事つるつる
同年十月十日源義経宣旨と若と檢非違使五位下小叙せれ昇殿と許しは祥賀に
統儀とつるつるつるつるつる大判官義経を称しつる仁体と色白くつる長髪と容貌優まつる進
退偶儻不羈もつる細儀と顧れつる智謀優長もつる事と韓信と秘術と傳つる事と源氏將軍
の害とつるつるつる小土肥次郎実少飛御とつるつるつる九郎判官中退つるつるつる平中判官源盛卿
流小文字園ふ攻入安養園坊のみ平氏且從つる又淡州屋務とつるつる源宗盛卿成又將軍と
つる城廓と據つるつる若とつる因之左衛門二年正月十二日義経とつるつる勅宣とつるつる源氏將軍
の所代官とつるつる進發のつる定とつるつるつる後とつるつる相從家とつるつる波守義定とつるつる因とつる大判官源義経とつるつる
冠者信綱富山庄司重忠佐々本四郎高綱平山武者所孝重二浦十郎社連加田小太郎

我盛同之節系支同四節純胤多々良五節能美梶原平之系時子皇孫太系孝同平治
承高同之節系純比良方古大節在重伊時之節我盛庄大節家永同五節弘方推名之節
胤平横山太節時兼行里八節在喜録田藤次光政武藏坊辨慶男良治とて其勢十萬
餘騎之同十四日共伊勢石江本質茂之社(を幣使あり平家退討の所初北上之種神雷
重ゆきく返るるを宣命あり去後小之守能頼神者茂之山陽道より長門國
我之判官義経南海道より四國(渡りて)之物浦あり平家屋橋小城廓とて
我盛成之陣場とて又中絶言我盛卿九洲の兵兵率之門字圍と圍り判官成之
之物浦より大淀江内忠後茂之船探之軍議ありと云小梶原系時中より船も逆櫓
と申物と立作の軍の自在と傳る操之作を中より判官逆櫓と何まそと
向之梶原系之逆櫓と船の船に艦(向)櫓と立作其故陸地(の)軍の進退逸物
の馬も驚く心も住りかふと云馬引と云引も安たまあり船軍の押しはる
所と押度より由々大車多とゆるが故強ら船の方櫓を押し渡りゆるを
判官と中より判官軍といふ大將軍の後より船に攻めしめし引退く軍
我盛之況兼之逸支茂と極悪大車勝利と得る事やと宣(を)梶原大將軍の謀れ
敵と中身と全くと故と亡れと行要と中より船後と顧(向)向と故をより討めんやと
降成知れぬ楯武者とて危を中より伏君尚氣と云加操不倍せらるること
言成放く申々判官が(色)成多と云知ると云楯鹿を以て我経は只故に
討勝たる事ありたる軍といふが船出(其)日より故小細と死するは武士の本之韓信が
と入平しく今と存んと云わぬ陽小出ぬ其如と故小細と死するは武士の本之韓信が
昔水の計もあれり(一)渡り経と大の成航と進道(成)味方の心が一筋をそく
敵(向)向の良策ありと云わぬ大將軍と云人討(進)儲(と)百挺千挺の逆櫓
とて立捨(我)経が船小忌(と)れ逆櫓(と)の(軍)圍(軍)も忌(と)宣(を)判官判官も
一云軍咄と云人梶原よりある事(中)赤面(と)わたり判官(判)索時(我)経と向
操も楯鹿小喻(と)希怪(と)我賞(と)尋(時)取(引)落(せ)宣(を)伊勢(之)希(行)正(八)節
武藏坊院小梶原(と)引張(と)時(人)系時(と)成(と)軍(の)評論(小)初(存)成(進)る(と)兵(士)の
判官(と)同(と)我(盛)系(平)家(成)之(と)考(計)申(系)時(小)船(成)與(と)り(と)云(と)云(と)云

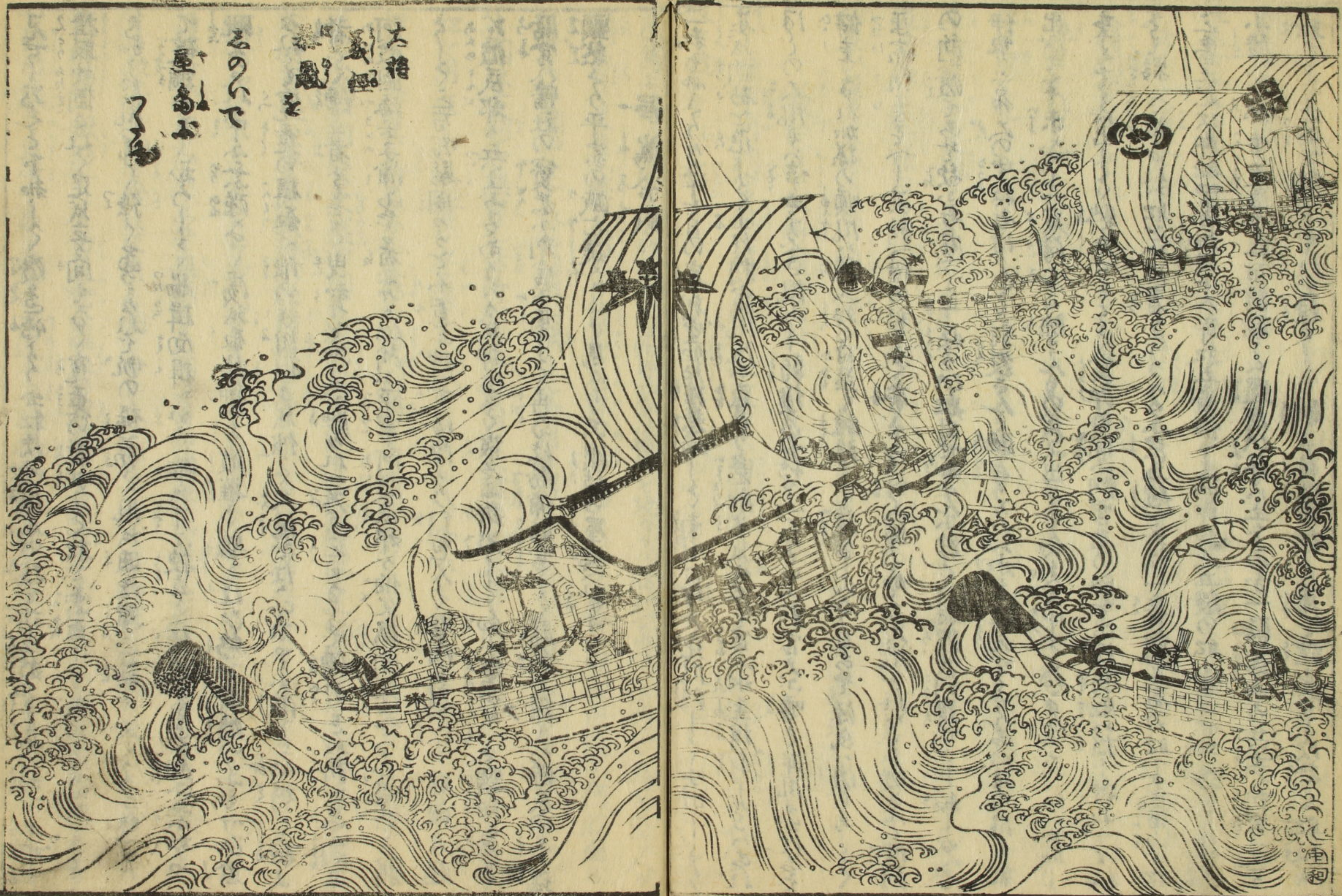


さよと子息素未未ま續いて進む利官いふく腹とまう太刀と取へ向所成二浦
別當義隆利官及懐止む畠山重忠提原と初うた土肥実平は保太と抱く多々長
五弟平次と押(支)中(中)は條互不極使るる争論其詮さう平家五漏團(五)鳴
か(か)は(は)又(又)謙(謙)舎(舎)飯(飯)の(の)團(團)呂(呂)も(も)野(野)多(多)う(う)下(下)当(当)座(座)の(の)興(興)言(言)意(意)執(執)の(の)ぶ(ぶ)ら(ら)は(は)若(若)く(く)は(は)信(信)
之(之)將(將)判(判)言(言)誠(誠)不(不)せ(せ)ん(ん)と(と)辨(辨)る(る)に(に)提(提)原(原)も(も)面(面)目(目)無(無)十(十)心(心)を(を)も(も)意(意)腹(腹)と(と)會(會)終(終)判(判)官(官)及(及)
と(と)議(議)せ(せ)る(る)判(判)官(官)都(都)と(と)申(申)し(し)時(時)申(申)め(め)く(く)う(う)も(も)令(令)惜(惜)し(し)空(空)り(り)ん(ん)人(人)々(々)あ(あ)ら(ら)う(う)り(り)多(多)
款(款)も(も)退(退)て(て)死(死)る(る)を(を)思(思)ふ(ふ)人(人)々(々)義(義)経(経)其(其)討(討)つ(つ)て(て)宣(宣)い(い)畠(畠)山(山)重(重)忠(忠)和(和)田(田)重(重)國(國)德(德)谷(谷)直(直)実(実)平(平)山
重(重)重(重)波(波)谷(谷)重(重)國(國)子(子)息(息)重(重)助(助)土(土)肥(肥)実(実)平(平)子(子)息(息)遠(遠)平(平)佐(佐)本(本)高(高)綱(綱)金(金)子(子)家(家)忠(忠)伊(伊)勢(勢)義(義)盛(盛)
源(源)五(五)郎(郎)兼(兼)田(田)光(光)政(政)佐(佐)原(原)經(經)信(信)其(其)才(才)忠(忠)信(信)行(行)里(里)為(為)春(春)武(武)藏(藏)坊(坊)存(存)慶(慶)判(判)官(官)及(及)に
附(附)從(從)以(以)振(振)東(東)運(運)糧(糧)の(の)論(論)小(小)恨(恨)と(と)懐(懐)引(引)分(分)せ(せ)し(し)二(二)守(守)紀(紀)頼(頼)小(小)佐(佐)長(長)門(門)國(國)へ(へ)赴(赴)ひ(ひ)たり(り)

義經暴風解纜渡四國

同十二年判判官既小纜と解く船と出次南風颯々吹来り兵船諸小吹上り七十八
艘(艘)折(折)破(破)せ(せ)れ(れ)と(と)結(結)と(と)今(今)日(日)還(還)る(る)順(順)風(風)今(今)や(や)待(待)た(た)れ(れ)も(も)風(風)折(折)れ(れ)し(し)二(二)日(日)
二(二)日(日)を(を)吹(吹)り(り)たり(り)十七(十七)日(日)の(の)寅(寅)刻(刻)空(空)か(か)た(た)津(津)雲(雲)雨(雨)し(し)南(南)風(風)は(は)降(降)り(り)北(北)風(風)は(は)吹(吹)出(出)し(し)り(り)
本(本)城(城)折(折)破(破)と(と)飛(飛)し(し)と(と)止(止)り(り)判(判)官(官)既(既)小(小)纜(纜)と(と)解(解)き(き)急(急)船(船)を(を)出(出)せ(せ)し(し)官(官)水(水)主(主)楫(楫)取(取)り(り)ら(ら)ま(ま)れ
ほ(ほ)の(の)大(大)風(風)争(争)出(出)る(る)風(風)弱(弱)化(化)お(お)存(存)し(し)たり(り)判(判)官(官)不(不)嗔(嗔)と(と)逆(逆)風(風)出(出)は(は)ま(ま)を
僻(僻)車(車)う(う)れ(れ)加(加)様(様)の(の)順(順)風(風)頑(頑)く(く)如(如)日(日)華(華)と(と)津(津)海(海)上(上)も(も)程(程)さ(さ)ら(ら)今(今)日(日)を(を)源(源)氏(氏)へ(へ)渡(渡)り(り)あ(あ)ら(ら)う(う)
平(平)家(家)用(用)意(意)を(を)へ(へ)其(其)所(所)僅(僅)の(の)努(努)を(を)も(も)た(た)し(し)け(け)り(り)海(海)か(か)る(る)大(大)風(風)は(は)い(い)よ(よ)も(も)波(波)を(を)て(て)判(判)
の(の)所(所)波(波)て(て)あ(あ)せ(せ)款(款)小(小)お(お)勝(勝)し(し)早(早)疾(疾)に(に)船(船)出(出)せ(せ)し(し)る(る)許(許)く(く)射(射)殺(殺)斬(斬)殺(殺)せ(せ)し(し)下(下)和(和)ひ(ひ)や(や)を
伊(伊)勢(勢)之(之)弟(弟)人(人)の中(中)拵(拵)お(お)け(け)し(し)射(射)殺(殺)せ(せ)し(し)船(船)を(を)ら(ら)れ(れ)水(水)主(主)楫(楫)取(取)り(り)せん(せん)あ(あ)ら(ら)の(の)風(風)船(船)
出(出)る(る)未(未)未(未)か(か)一(一)定(定)海(海)を(を)流(流)す(す)ん(ん)の(の)風(風)又(又)出(出)さ(さ)る(る)夫(夫)中(中)に(に)死(死)る(る)ん(ん)ど(ど)た(た)り(り)同(同)下(下)
と(と)縣(縣)に(に)風(風)る(る)れ(れ)船(船)と(と)は(は)者(者)さ(さ)ら(ら)う(う)る(る)ふ(ふ)思(思)五(五)艘(艘)と(と)出(出)次(次)一(一)番(番)判(判)官(官)及(及)の(の)船(船)二(二)番(番)畠(畠)山(山)が(が)船
二(二)番(番)土(土)肥(肥)部(部)船(船)四(四)番(番)和(和)田(田)小(小)太(太)郎(郎)船(船)五(五)番(番)佐(佐)本(本)高(高)綱(綱)船(船)五(五)艘(艘)の(の)船(船)小(小)馬(馬)の(の)せ(せ)兵(兵)糧(糧)系(系)積(積)兵
小(小)隨(隨)下(下)部(部)歩(歩)走(走)る(る)と(と)一(一)百(百)餘(餘)騎(騎)と(と)過(過)度(度)は(は)等(等)へ(へ)上(上)下(下)み(み)か(か)一(一)騎(騎)當(當)子(子)の(の)兵(兵)士(士)判(判)官(官)已(已)が
船(船)を(を)り(り)舟(舟)と(と)姓(姓)し(し)せ(せ)れ(れ)と(と)標(標)と(と)し(し)て(て)馳(馳)し(し)自(自)傳(傳)の(の)如(如)舟(舟)と(と)姓(姓)と(と)し(し)て(て)度(度)款(款)五(五)船(船)殺(殺)成

大相
長船
船
のり
り
り



見せしむると下知しく渡りし出如吹風本の枝と折立波葦葉の形と上水主
楫取吹倒しし足底亭間もろく究竟の者共く和と素直しく帆柱とて既と上車
まかた風よく強くあつたを帆の裾と切く風は通れ續て筋と又さうりし後さげ
て破綱のみとあつしし、楫楫面楫とびく船を下に控さ、傍風をまき面ふまか
馳りし中ふ系隊さ、湯気取後舳お波推し艦を波に船と濟波いふもつひ船
なれも究竟の楫取の浪の風は船は船と大湯とはいさるし船と飛越し馳よ
者とも漕者ともとく曳舟とちりく馳ればあまの目さるし漕の目新と只の耐
阿波國海士子浦の着るまかりし新ふ平軍阿波民部が伯父橋向外記を渡連と人將
とくく之右所騎圍のりと不意に押寄海陸より引包んく船討討討一勝浦月越
阿波民部が兵士とあつたる瓜押寄く散るも踏散し向く奴原成一と頸切多
勝宮八幡社の寶衆小判官下馬とく再がは勝浦勝宮とく勝利と得し源氏の吉瑞
顯然さう平家の滅亡疑さしと馬お打赤瀬岐の屋嶋へ馳ふる

屋嶋合戦

屋嶋は平家源氏方の伊藤の河野中郡通信と攻めり勝利と得し通信は船百二十人
頸切斬る大長宗盛更檢あり備へるを社登守へ移らるる源九郎義経流し阿波國且
着ると國の定て終極瀬別へ馳りし用意ありととる社をなす放し六馬騎
し國味方物部無智之急舟船も足ぬ勢も隨く押寄し舟軍あり侍共り行
船と用意しし同裏守護しし我しととるねいゆとく先帝と格等舟院二度
以下女房達公卿及上人屋嶋の惣門に堵する舟船もあつた去年一谷と討渡り
とる人々小内大臣宗盛中絶言教盛權中絶言教盛權理を統盛右衛門督清宗小松
少將有盛社登守教経小松侍渡忠房已下と其外侍共り城中小集り、大長宗盛
一艘の船小集りるる右侍門督も鑑着り討さるしととる舟をなす小松女房
達の中ふをひらるるあき無熟され馬背知別原氏に僅五十餘騎と、屋嶋の離る後
とる攻めし國と登り平家も國と合く合戦と下ゆり多判官の紐地錦代直吉宗
坐滋體も銀形おる白星境小濃紅の纒もく北四搭とる小中黒征まふ金瓶の太刀
と佩滋藤弓真中と取黒馬の太遲小白覆輪の鞍と墨先陣も進んく馬も白味おほせ

陸伍と乱る下知りて平軍武藏之希存居し尉有國城の標やとる者やと今日
の之將軍 誰人ぞ向伊勢之新義盛歩出とて大軍も跡を我君に傳れ帝十代の後胤
八幡太郎義家四代の子孫鎌倉右兵衛權佐殿の御弟九郎之平新官をそかしこの八幡
の重臣とて小堀之故左馬頭義朝之妻九條院親司常景の腹の子と名をそ承る安徳
は難うしかと金ある人從者ぞとて義朝とて陸奥下りし者の事とて伊勢之
腹とてかくとて小堀破山の軍小堀山に進入奉命とて令りて遠く上
り者うか樹おも吉のわらひ傳ふが申しとてさるる不實加ふ者申せり今
も情を以て助さるるてお申さんぞとて有國等も我君の御恩とて若より夜合
之かた後何とてを合とて東國の者もい黨も高家も陸奥とて有國一が況年来
の重恩とて忘れし帝王に向ひ進んで悪口吐舌反駁と奉勿釋が伊勢の珍森
とて朝々山とて年貢正税と追落し在る所を山賊強盜とて妻子を奪ひ
とて奪取せりありし事ありし許し事ありしと金子十郎が忠告申せりは金子十郎
とて益々合戦の法を利すも度勇威とて本々一谷の我武蔵相模の兵は勢へ見ん
とて只討出く細うとて小堀等も金子十郎と引合し有國が骨を多く射り
たり有國の馬の舌を射ち曾根小堀とて申す夫風負く後言我止す東國の
家九郎判官先とて土屋小次郎義清後を清實基同息直之良清小次郎
資能諸身を清能の椎名次郎胤平等致しとて許ひかて平家のみなり城中は
清盛嗣上徳五郎を清忠光同義とて清宗流之也右馬允家村同七希高村下の
標より下合せり防戦の術とて一日と追たり能登寺教授の物取と鬼神の中
りて取てし我兵の多し源氏の兵多くけり我討する所知りたる平家
之勢と味方の勢とて後には敵内裏に引籠りて我人由らむとて上兵
海上に教とて屋島の在家に焼掛く一方は付く責下りしは里に建て
船とて及ぶる在家一千五百餘家軍兵は火を放し船が瓦礫とて次々内裏
に覆ひ一討し向は鏡とてひねり煙海上に浮くまの波煙は船とておとせ城内の軍を
の取し手ひねりの中男女はあはれとて路たはるる旗の者合戦忽陸に乱る
兵船は頻りに上り周章平軍は驚く海上に船を列の船楫小楫揃とて入り

船に或一艘或二艘漕舟を散らし射る源氏の方利官はさうしく畠山庄司
重忠は谷直實平山武光所季重土肥定平和田義盛はさき綱と名をかく一騎
當千の兵東國も肩負ふと者たる人々我と思つ平家の兵組やく旬かけ雨の
ぬく小射る時移れも源氏互に勝負あり源氏七騎の將士馬の足を休め息を
継ぐ満ち満ちたる船の陸に休居り平家も船を仲舟清除くまじり猶ほさき
小勝浦に軍をさし置屋崎浦の煙をさき合戦洗ふ始り利官も無怖るをぞ
まけくと退走馳ま利官もさきと何者ぞと向ふ故八幡原の所乳母子ふま上の
法橋龍明の二代孫義次を流尉龍忠之進平家世と取く文下と堂押する山莊
且後几二十年未替居し侍りたる兵清佐及院宣と奉る平家謀戦と被る乃向
條の橋一宗馳奔して上る利官旧好と也い歩く神妙とく褒賞し中常荒
原の兵入るし時梅りり我たり平家と懸合の軍もさきと途を力戦し
ささげ源氏互に甲乙さしす川橋く両方お引まき退きさる

那須與一射扇

源平の軍兵さきと息を絶く又戦とさる所舟仲の方より莊り船一艘漕舟向く
漕舟は月日日の事さるは風小翻纏りし柳の五重紅は袴着し健足被る女房
あり又紅の扇は朝日の出ると接し船の舳頭さきとあり射多とく源氏の方を招く
い女房のひ建礼門院の后立の御侍千人の中より擧出せる頼司玉虫蛸糸といふ舞の
上より舞の糸も中今年十九才小せ成るるまの髪度眉の額も凡肌繪も
青も茶も及び難し物節夕陽も耀く美艶を流すはふたる斯るし西海もくは具
それらも撰出されし扇さきとる挿し扇の中故高倉帝嚴清浄の御二十平
切き明神小奉進ありみか紅日凡此扇之平家都と落るい時敷清社奉りし
河神王佐伯景廣い扇と出るとまれの明神の所秘藏日故院の御情帝業の御護
たふし後れい扇と持せありては常家軍も勝利之射中たる源氏利と得るさき
たふしおは源氏射外しは常家軍も勝利之射中たる源氏利と得るさき
と軍の占形はさきらる斯く女房の船の中をさき入る源氏も遠きさきは海上
の風景斜るる面白く眼と驚し心迷は者もあり利官畠山と名を重忠は本蘭地

那須與一
 平家より
 出陣の
 的を射て
 千載まゝ
 英名を
 大公を
 六輪小舟
 雷景の
 たふひ形
 くの



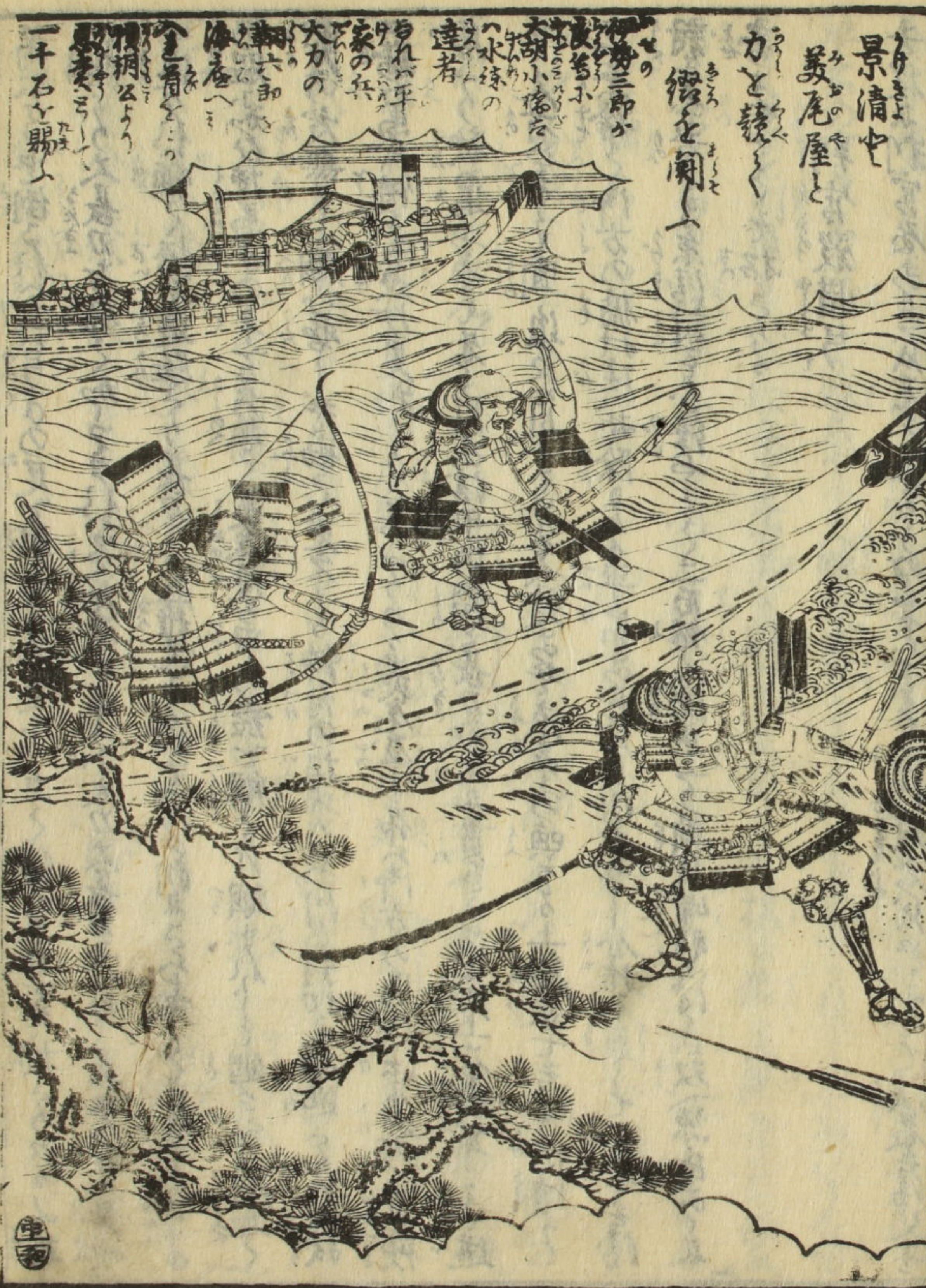
の直垂小楯繩目の鎧着て中黒の矢負所藤の弓に真中六騎の馬に大逞金巻
乃鞍並利官の弓に此脇小進出く畏て作義経の女めける者も平家ありしが新橋
とて定く進出く興文とん所とて射はれ用意なく真中より進出く射落さるの
計策をわらぬの扇射れるやと宣て畠山畏く君の侍家面の面目をなせる上は箱と
中より次ぎうかぐまよとゆいた晴の瘧を重忠お物取て鬼神といふも更平辭退
申はれ體脚氣の若る上は間氣多とてよもあつ小覺ゆる射損くくはたの
社へさかまよと源氏一統の清瑕障と存次一向作人お侍れと辭退は畠山かく辞
しる間諸人よと矢了利官の扱難有るも乃之畠山お侍方へ下中園住人那須
太郎助宗とて十郎兄弟よとせかまの小物賢く仕作かまをあらま一人免一佐とて
とく強弓遠矢お物ふとの時お侍は業多しと深言を放ち切りてこそ十郎とて
めざらる小褐の直垂小洗革の鎧行白の甲二十四指る白羽の矢五箇藤弓の塗巻とて
直中取く諸へ下は悠々然とて泰なる利官の扇はまよと存次御説の上は細成申に
及のよと谷巖石落の附馬弱く弓の賢成ぬ実せ侍りしは矢はつと

念小振ひく定の矢はつめつと存せ度身もと作與一冠者小兵めくつれを懸る
的かへ外ゆへ希と定の業はつとて存次侍は座とて存次議ておよりとて與一と
召れり其日の装束は紺村濃の直垂小緋緘の鎧鷹角反巻と居頸よか二十四指り
中黒の矢負滋藤弓も赤銅他の太刀と佩宿赫白馬の太逞小洲岬ふ子もの花散る貝
鞆並く多しとる利官の所業小弓取連く畏りてとれ與一の扇は晴の
所作せ不覺とてかと宣とて一修成義子細やうんととる所は伊勢と希義盛後着
去清実基勢與一と利官の米小引居と面々の故障小見洗も暮るを後早の十希
指り上は子細やあつと疾る急送く海上晴く成さゆいた味方の太事と早と
と云く與一甲と脱着も持せ黒烏帽子引きく梅紅梅の錦巻くく細くうり
扇の方へ向ひたる生年十七歳を白く小髪生く弓の取手も馬の騎風俗優る男
みを見へるる流打津お物とらひの神と見つと主上と侍り國母建礼
門院二位及外官女の御船其敷多く備るる屋形くお景は翠翠巻九帳
さめたる袴濕巻の堅きと揚梅枕孝

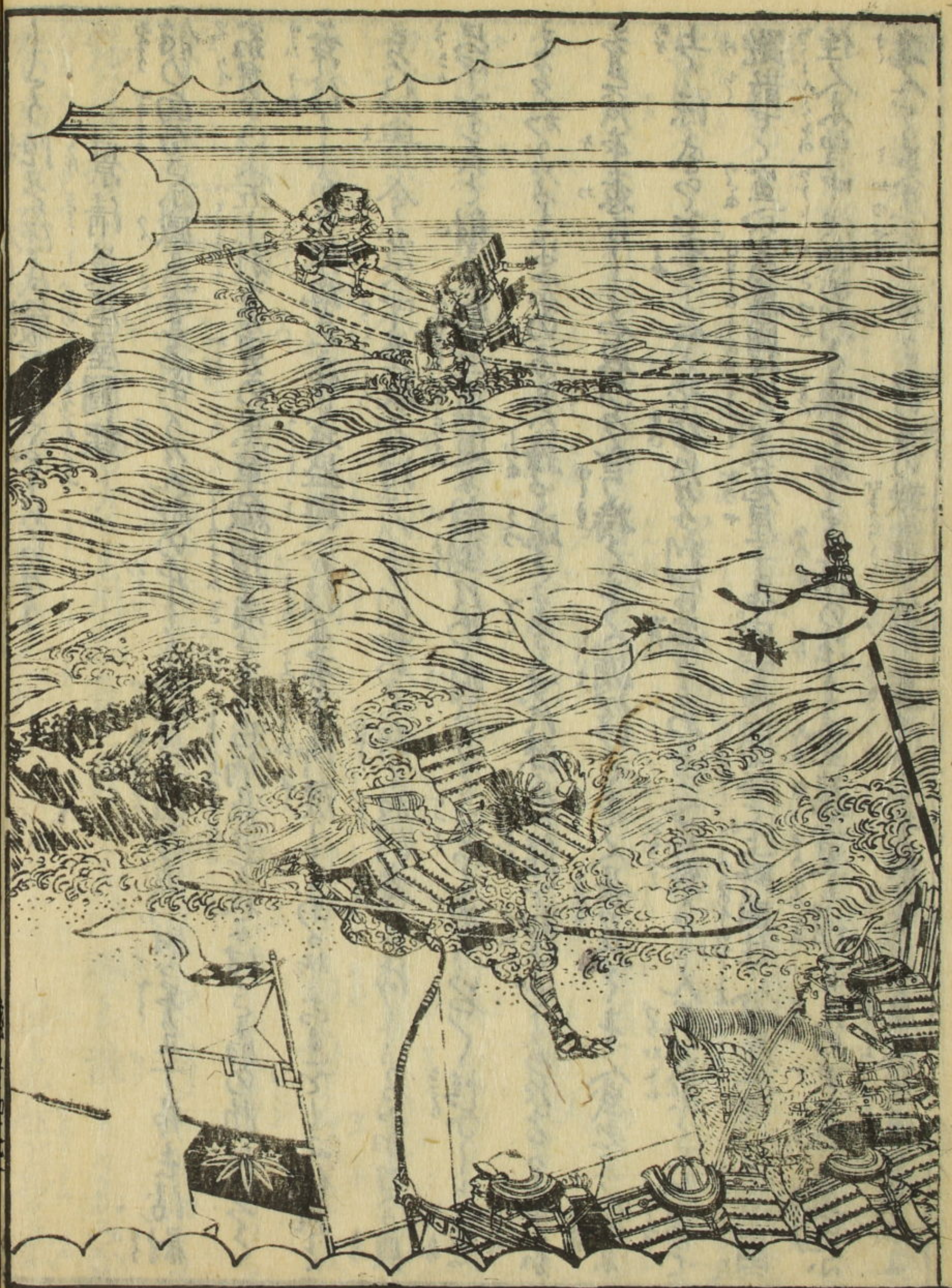
袖も通す... 伊方の軍と一... 後と通見... 比... 三月十八日... 北風烈... 平家船と一... 見物... 南無八幡... 神明日光... 切物... 心中... 一... 浦郷... 海... 紅の扇... 隆... 景清美尾屋闘鏝

景清美尾屋闘鏝

船の面白... 伊賀平内... 五十計... 伊勢... 今... 射... 平家... 源氏... 美尾屋... 丹生... 信濃... 進...



景清中
 美尾屋と
 かと競く
 御を闘
 伊勢三郎
 大胡小橋
 水練の
 達者
 舟に平
 家の兵
 大力の
 津六郎
 海をへ
 金骨を
 頼朝公より
 賜ふ
 一十石を賜ふ

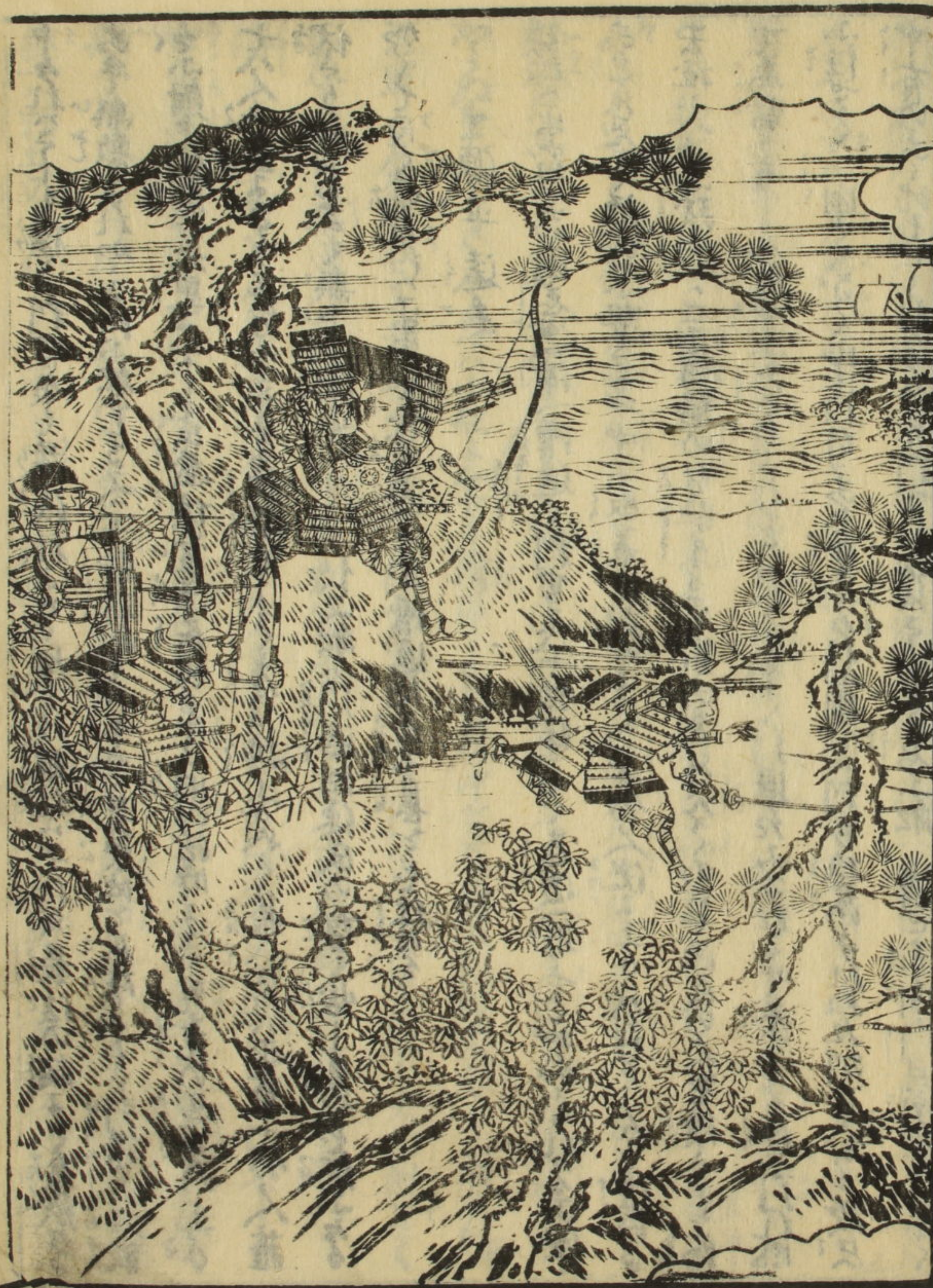


馬を倒れし玉弓の足と蹴馬の方より、きく頓て太刀を抜たり、又楯の
下より長刀を振りかき、其尾を十布の小太刀の長刀の叶り、さきひく人
て逃ぐれ、頓て後て追駈より長刀を、藉んてかき、所より、きく長刀を、
の脇かひ、按馬の手に、延て、美尾屋の甲の、鍔と、胸と、胸と、逃ぐ、
四方の、度無、胸と、ぎ、助、目、針付の、板より、引切、を、逃ぐ、
四、馬、憤、見物、居、美尾屋十布、河方の、馬、延、入、直、
居、り、款、退、く、其、後、甲の、鍔、長刀の、先、貫、上、人、者、
く、者、も、聞、込、人、是、あ、者、の、喚、上、總、悪、七、清、景、
名、捨、河方の、楯、除、平家、の、河、か、心、地、を、直、と、
射、不、者、も、系、討、を、後、と、二、百、人、比、上、楯、唯、羽、は、二、双、源、氏、あ、
あ、と、と、を、招、り、

判官殺借弓

去程、判官、後、あ、と、を、安、く、ぬ、事、と、田、代、冠、若、小、立、後、重、清、父、子、
金子、足、さ、り、馬、の、一、伊、勢、二、弟、と、後、と、判、官、八、十、信、頼、鳴、若、成、か、
平家、の方、馬、小、騎、り、勢、か、一、之、略、歩、美、若、り、た、馬、小、當、ら、れ、と、
し、も、息、を、引、退、と、み、船、を、乗、り、楯、美、成、散、り、様、且、散、り、
勝、手、若、馬、の、太、腹、は、り、登、り、入、り、攻、撃、船、の、中、より、惣、も、
の、甲、靴、か、り、と、ち、め、く、二、三、及、り、味、方、の、太、刀、長、刀、の、
押、ひ、く、攻、撃、と、れ、と、ち、め、く、判、官、弓、を、取、落、し、れ、ぬ、と、
り、の、と、掻、き、取、り、と、ち、め、く、河、方、の、兵、共、且、捨、を、
と、せ、帰、り、れ、る、老、若、と、み、み、川、彈、と、し、と、縦、千、金、と、
且、代、せ、せ、と、ち、め、く、判、官、弓、の、情、と、ま、取、り、
と、ち、め、く、張、若、と、人、と、張、叔、父、若、朝、と、り、弓、の、
庭、弱、と、り、と、款、の、も、取、り、ま、れ、若、源、氏、の、大、將、軍、
に、情、と、命、且、代、り、取、り、と、宣、い、若、あ、れ、と、感、
佐藤、継、信、忠、死

屋嶋内大宮宗盛御船中よりおぼろひの如く徳忠を仰りしに源氏の軍將九郎
冠者夜々目も多し討外しゆる事返る遺恨をいふ最末七騎もあたりし其孫黨
も怒りて討るに海上小馳入る所盛嗣然りまかけし所いぬ敵形の申す金能太刀掲
ぎ装束之船より上り軍に之相構り九郎冠者も目もかけし所宣し徳忠の返事
も其條へ存する所も作とく究竟の事二十餘人殺せし事芝原地成るまで待たず
る判官日既小晩るに夜夜法の軍に將あり只今故なき者もいと貴きり討る者
とて一操操へて討立りし土肥次郎安平大將軍及その合戦將を交作し者も
傾りし判官とて本陣に留る事安平大將軍進みし子息源大布遠平島山重忠
和田義盛徳谷直安平山季重佐々木為綱金子宗忠徳谷重國子息重助淡邊
肥伊勢三布義盛鎌田義光政佐藤二郎之孫継信實忠信行正一即ち義成
路をくし騎馬子の者も五十餘騎集りて蒐歩平定歩を歩みし芝原地より
討り引落し馬に射る源氏の馬の上より落し矢射る事河返り
河川追り入る射合より流る血汐の砂と深揚上の塵埃の煙の如く源氏の血
陣小昇入平家討りし船小運びぬふに常陸國の住人鹿嶋六布宗綱行方六布
鎌田義光政と始りし源氏の軍將十餘人討りし能きも心も剛力も強
兵の多し源氏の血汐とく少く踏蹴しを見を仰りし美談く射る夫も武藏國住人
河原之布宗頼同前射りし引退りし次は行正を流河俊貞板と射りし河原之布宗
内甲と射りし落しり次は内田に布重綱小腕射りし次は判官の乳母子奥州佐藤三郎
義清継信と黒華織道と着りし首の骨と射貫れ眞逆も落しりし能き守の
重菊王丸といふ太刀を援け飛りて継信が首成りしとす所と佐藤忠信引固く放
矢菊王が腹を射貫りし一足も引渡り倒れ死す忠信も布重八布重定太刀
もくも首を斬りし所とかく徳忠守重が首を斬りしと曳聲し船に投入忠信は内見
の継信を肩引りしはは陣中入る判官近し居るゆひ今一及最後之言ありし宣し
継信息吹出し世も若げしとら夫取身のゆひ敵の矢も中し主君の命も代り兼てなる
とらし更恨み絶え思ふ事も老る母も捨て親し老るも別して遠く津波興り
上りしより志し平家討りし日本國をやりしゆりし見もく事も七拍りし



中へたゞうも極む利官もも落込社よとゆふ次絶信はせ成最後の詞もも息散る
あま無難もれかゝる所小使もも又干騎計船より下を芝築地と本庄より引諾差諸散
く小射も進む若更まかゝ武藏信常陸房あまゝ山法所より究竟の長刀の上へ
七八人歩まより長刀十文字子採掃本より成成押ふかゝ藤八の平軍十人藤
伏より使せもも無下小間道く見られ又船小引退た源氏の勢も増し息も絶ふも
かくて月も暮るる所定へ志波浦へも漕退た小息もも休むる

源平遠矣

ゆふの平家も出陣志波浦へ漕退く利官も八十餘騎もも志波へ退ふとせがらるる平軍
あま無難もれかゝる所小使もも又干騎計船より下を芝築地と本庄より引諾差諸散
く小射も進む若更まかゝ武藏信常陸房あまゝ山法所より究竟の長刀の上へ
七八人歩まより長刀十文字子採掃本より成成押ふかゝ藤八の平軍十人藤
伏より使せもも無下小間道く見られ又船小引退た源氏の勢も増し息も絶ふも
かくて月も暮るる所定へ志波浦へも漕退た小息もも休むる

眞光も進んて我ひる楯も體も碎けりと散る小射も和田義盛も船もも馬の上より
平軍の中成差諸引諾雨のゆく小射も精兵の利もも二所が内のもも外を強く
射より其夫もも見せ白鹿鳥鶴の平白崎の羽割合もも射より夫の十束も伏あり
ろふ和田小太弟平義盛もも書付より平將和盛脚是もも平家もも
あま無難もれかゝる所小使もも又干騎計船より下を芝築地と本庄より引諾差諸散
く小射も進む若更まかゝ武藏信常陸房あまゝ山法所より究竟の長刀の上へ
七八人歩まより長刀十文字子採掃本より成成押ふかゝ藤八の平軍十人藤
伏より使せもも無下小間道く見られ又船小引退た源氏の勢も増し息も絶ふも
かくて月も暮るる所定へ志波浦へも漕退た小息もも休むる

且面もつて後命も惜に攻殺へされども平家の沖方八十善の帝王三種神聖公帯して
つてせめて源氏いふ有る人と危うくも沖は白雲と覺くて虚を漂ひつるを
いかに主もまた白旗一流をたて源氏の船に舳舳掉付の緒はつる程を見へる

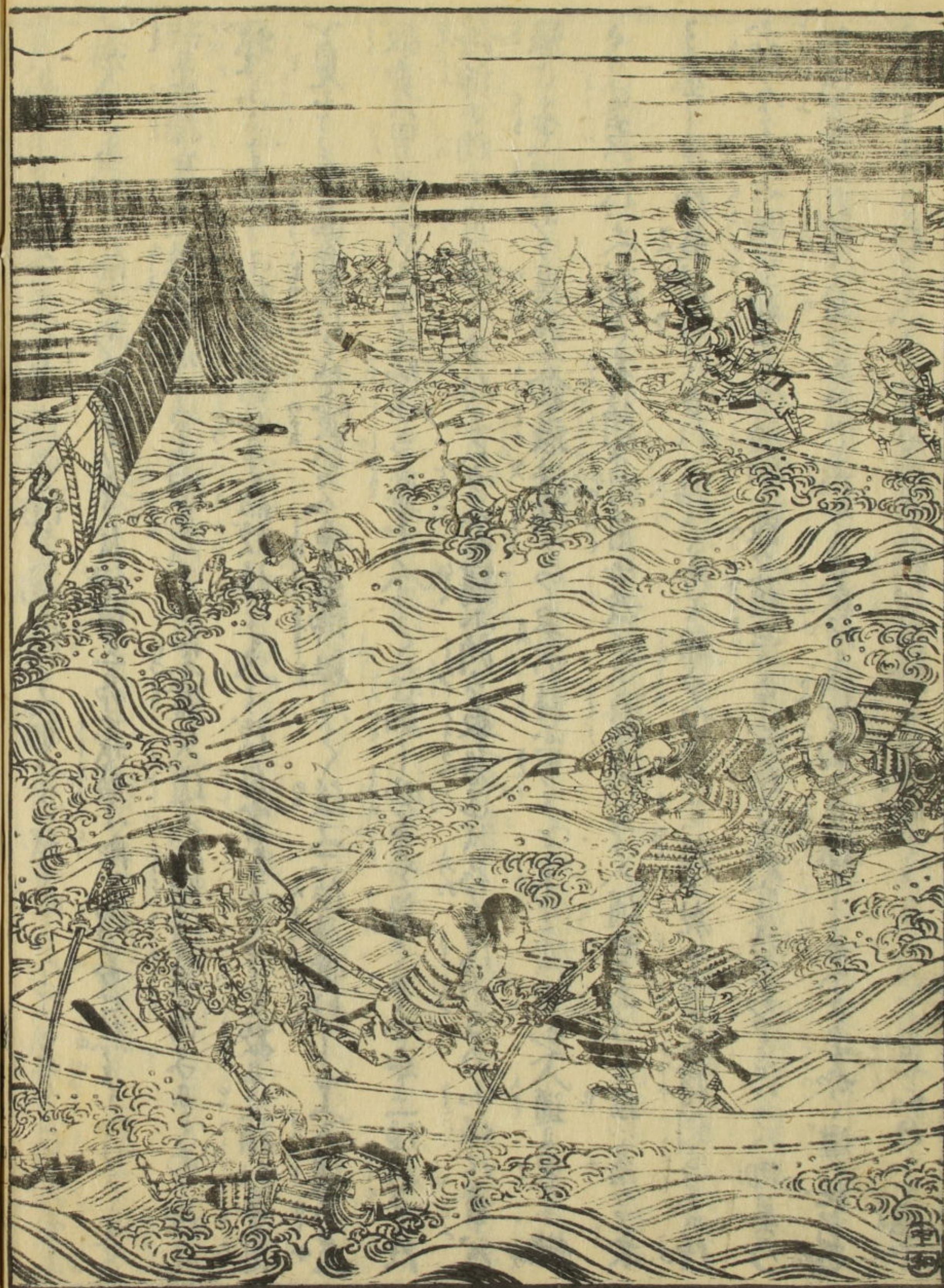
安徳帝入水能登守最後

刺官され八幡宮の現しるを怪しむ甲と脱し水に溺る兵どもみかかくのや
沖より頼といふ奥三子平家の船に向ひたる久宗盛卿將士晴信と厚く勅せざと
われ平家の船より通うらう其山瑞々の中へ今頼がうとを及べしと各入阿波
民部重杜今叶へてとるをひかへん忽心変へて源氏とつ成りたり其後四國九州鎮西
の兵どもみか平家公持く源氏に付今まも隨ひ附たりしも君に向くうと引主に對
しと太刀を抜んと彼の家をばつととれは浪高ううと叶ひ難くあつたはみかん
ととれは故義銘とほく待たう源平の國闘ひ今日限を日とらう去は源氏
の兵ども家の船を乗移れし船を小降り水に楫をみか斬殺されし船を滑着更みか
新中絶言知盛眼小舟を急所所の船を春ゆひと中へ今新と覺作見若しと
とみか海へ投入し掃除せられれを艦舳を走せしは掃除しゆひたり女を房連
中絶言後軍の掻いへるやと向ひて今球を吾妻男とを源氏せしとからしと
若れははの条に期ふるんを戯れせると聲を喚叫ん位ゆひたり位は日米思ひ
設せむと事うらへ鈍色の二ツ夜を被さ練袴の傍高く取神國を脇挟み寶劍を腰に
指主上と抱き寄せし船を源氏へ帝へ入るをさるるをひつる源平の源とらうのゆせむひく
舟體めくやふと急ぐ舟を驚くさるうと舟背からさるる舟を親類うきせしとせ
ゆひつる舟心迷ひる舟氣をさるるを國に引つれせと修れたるを悲しむる二位は
兵共舟舳をまて進ませ位へ別の舟舳にまきまきと流せしと流て君は先世
十善の戒ひの舟力より今萬葉の主とせむるを悪縁を引きて舟運沈れ
るをせむるの東に向ひて伊勢太神宮に祈願せむるは其後舟向せ西方津より
東運下頭らんとせし舟念伴侍へては國を散敷とせし物憂境との流乃をた
まを極楽浄土とて同出た都の侍を無きしとせし舟を揺る慰みとせしと
今せしるみりもそはのさるる流の下に都ありとせし

かく諷しと果次海より入る二位尼も同はやく入るる國母建礼門院と居る先帝
の所乳母神典侍大納言典侍以下の子官船の船舳より將び叫びの影に女院も後
まゝとて所破と被入海より入るる所破と被入海より入るる所破と被入海より
入るる佐の局内侍所の所唐櫃とて海より入るる所破と被入海より入るる所
れと倒しひたる所破と被入海より入るる所破と被入海より入るる所破と被
忽目れぬる平之絶言内侍生捕らるる所破と被入海より入るる所破と被
凡人見る事なれぬる所破と被入海より入るる所破と被入海より入るる所
より所破と被入海より入るる所破と被入海より入るる所破と被入海より
もふもぬ取組鎧の上の礎より負く海より洗ひたる小松判之位所破と被入
頭行盛も鎧の上の礎より負く一筋入水よりひたる所破と被入海より
宗盛父子も一はむ所破と被入海より入るる所破と被入海より入るる所
伴もくす所破と被入海より入るる所破と被入海より入るる所破と被入海
ゆひぬる所破と被入海より入るる所破と被入海より入るる所破と被入海

てかきとあり二船にありたるひたる所破と被入海より入るる所破と被入海
共生捕らるる二位入水より一はむ所破と被入海より入るる所破と被入海
秋子もくす小松内侍の所破と被入海より入るる所破と被入海より入るる所
と見ると心憂覺れしを宣ひたる所破と被入海より入るる所破と被入海より
取身の男子も所破と被入海より入るる所破と被入海より入るる所破と被入海
伴神も所破と被入海より入るる所破と被入海より入るる所破と被入海より
張るる僧あり異名も所破と被入海より入るる所破と被入海より入るる所
うらむ若たれん所破と被入海より入るる所破と被入海より入るる所破と被入海
も出ると所破と被入海より入るる所破と被入海より入るる所破と被入海
小須も所破と被入海より入るる所破と被入海より入るる所破と被入海より
徳也と所破と被入海より入るる所破と被入海より入るる所破と被入海より
まゝとて所破と被入海より入るる所破と被入海より入るる所破と被入海より

徳義帝 始末 平将 入水



かま刺官叶りとも思ひけん長刀をば引よの脇より後味方の船に支計除たるに
 ゆくりと飛來りしに社も及早業や岩さうりん續ても飛ぬらんかろくさひん太刀
 長刀に海に投入せし殿も脱けたり鎧の袖草摺りて撥り捨て胸計着くべきに成大
 ん成播け船の横を立出たま聲と揚ぐ保氏の方且執り思ひ共めらる考て教所廻る虜に
 せし鎌倉下つて兵備は一言憚り思ふべき事や案と宣ひても案共をくもさうりん
 ちよ土方國住人安藤大領実者さふ安藤太郎實光とく九二千人力顯りて剛者
 執此も岩らぬ事共も人具らるる事の次第も普通は勝てる兵に過ぎぬ二人
 案合へて縦令社を居心おそいなるも何程の事り有べき長十丈の鬼成も我等
 三人が捌けたらん其の中は従ふとくく小舟も乗社を居の船も推返りておぼれ太刀
 の鋒ははく一面ふ討りか社を居まはれ成見ゆひくまはれりてと先直者進ん
 だる安藤太郎等も襦袢を合せし海に中へ踏入りし後くか安藤太郎等は
 只の脇におぼれ後味の次第も馬場の脇におぼれ使へ一編結りておぼれしを四子の
 の供せしとも生年廿六歳とく海にさうりん入中へ是は同四月四日刺官成経合戦乃
 盛平二年

次で社進りて院前刺し奏及去は二月廿四日午時長門國赤間浦に於て平家家志
 討取大將軍若田大官已下虜神盟内侍所無き御入りさるる寶劔の教多神主
 累弘み作と傳と探求ししとて注ししとくさるる法皇之早御前御前御前御前
 号へとも一みさくはしりし

